

県道犀川豊前線バイパス建設関係埋蔵文化財調査報告 第1集

# 久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡

—福岡県豊前市久路土所在 久路土芝掛遺跡2次・久路土高松遺跡2次調査の報告—

福岡県文化財調査報告書 第242集

2013

九州歴史資料館



南側から調査地を臨む（中央道路より上が久路土芝掛遺跡、下が久路土高松遺跡  
好天時には山口県宇部地域を臨むことができる）



久路土芝掛遺跡第2次1号住居跡 遺物出土状況（北から）

# 序

福岡県では、県道犀川豊前線バイパスの建設に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成21年度より実施してきました。本報告書は平成21年度から22年度にかけて行った、豊前市久路土に所在する久路土芝掛遺跡と久路土高松遺跡の調査の記録で、県道犀川豊前線バイパスの建設に係る発掘調査報告書の第1冊目となります。

発掘調査では、古墳時代中期前半の竪穴住居跡や大溝など、集落の一端を示すと思われる遺構が見つかり、また縄文時代後期の土器が出土するなど多くの成果があげられました。

本報告書が教育、学術ともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成25年3月29日

九州歴史資料館

館長 西谷 正

## 例 言

1. 本書は、県道犀川豊前線バイパスの建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県豊前市久路土に所在する、久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡の発掘調査の記録である。両遺跡ともにすでに豊前市教育委員会によって圃場整備事業に先立つ発掘調査が行われており、いずれも第2次調査の記録となる。県道犀川豊前線バイパス建設関係埋蔵文化財調査報告の第1集にあたる。
2. 発掘調査は、福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、整理報告は、同じく福岡県九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は小澤佳憲が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は平成21年度は熊本航空株式会社に、平成22年度は東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行った。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は、小澤が行い、発掘作業員が補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲の下に実施した。
7. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「椎田」「中津」「下河内」「土佐井」を、また遺跡周辺地形図は豊前市発行の1/2,500都市計画図を改変したものである。実測図等は全て世界測地系により表記しており、方位も世界測地系による座標北を用いている。
9. 平成23年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。
10. 本書の執筆・編集は、小澤が行った。

## 目次

I はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 調査の組織	4
II 位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
III 調査の報告	11
1 久路土芝掛遺跡第2次調査の報告	11
(1) 調査の概要	11
(2) 竪穴住居跡	12
(3) 土坑	19
(4) 溝	19
(5) その他の出土遺物	25
(6) 小結	26
2 久路土高松遺跡第2次調査の報告	30
(1) 調査の概要	30
(2) 竪穴住居跡	31
(3) 土坑	31
(4) 溝	35
(5) その他の遺構	36
(6) その他の出土遺物	37
(7) 小結	39
IV おわりに	40

## 図版目次

巻頭図版	1 南側から調査地を臨む	2 久路土芝掛遺跡第2次1号住居跡遺物出土状況
図版1	1 久路土芝掛遺跡第2次調査区(上が北)	
図版2	1 調査区遠景(南から)	2 調査区近景(北東から)
図版3	1 調査区北半部(上が北)	2 調査区北半部(南西から)
図版4	1 1号住居跡完掘状況(北から)	2 1号住居跡土層(北東から)
	3 1号住居跡埋没時に掘削されたピット内からの遺物出土状況(北西から)	
図版5	1 2号住居跡完掘状況(東から)	2 1号土坑完掘状況(西から)
	3 2号土坑完掘状況(北から)	
図版6	1 1号溝内土器出土状況(南東から)	2 同上(北東から)
	3 1号溝土層(南西から)	
図版7	1号住居跡出土土器(その①)	
図版8	1号住居跡出土土器(その②)	
図版9	1号住居跡出土土器(その③)、2号住居跡出土土器、1号溝出土土器(その①)	

図版 10	1 号溝出土土器 (その②)・土製品
図版 11	1 I 区 (右が北) 2 II・III 区 (右が北)
図版 12	1 II 区 (右が北) 2 III 区 (右が北) 3 IV 区 (右が北)
図版 13	1 調査地 (北から) 2 調査地 (西から)
図版 14	1 基本土層 (I 区中央部西壁) 2 1 号住居跡完掘状況 (東から) 3 1 号住居跡ピット内縄文土器出土状況 (北から)
図版 15	1 1 号土坑完掘状況 (北から) 2 2 号土坑完掘状況 (北から) 3 3 号土坑完掘状況 (北から)
図版 16	1 4 号土坑完掘状況 (北西から) 2 5 号土坑完掘状況 (北から) 3 6 号土坑完掘状況 (北東から)
図版 17	1 8 号土坑完掘状況 (南から) 2 9 号土坑完掘状況 (東から) 3 10 号土坑完掘状況 (西から)
図版 18	1 11 号土坑完掘状況 (北東から) 2 12 号土坑完掘状況 (東から) 3 13 号土坑完掘状況 (東から)
図版 19	1 14 号土坑完掘状況 (南から) 2 15 号土坑完掘状況 (西から)
図版 20	各遺構・その他出土土器、遺跡出土石器・鉄器

## 挿図目次

第 1 図	調査区位置図 (1 / 2,500) . . . . .	3
第 2 図	遺跡の位置と周辺の歴史的環境 (1 / 25,000) . . . . .	7
第 3 図	久路土芝掛遺跡第 2 次調査遺構配置図 (1 / 300) . . . . .	9
第 4 図	1・2 号竪穴住居跡実測図 (1 / 60) . . . . .	13
第 5 図	1 号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1 / 3) . . . . .	14
第 6 図	1 号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1 / 3) . . . . .	15
第 7 図	1 号竪穴住居跡出土土器実測図その③ (1 / 3) . . . . .	16
第 8 図	2 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1 / 3) . . . . .	17
第 9 図	1・2 号土坑実測図 (1 / 40) . . . . .	18
第 10 図	1 号溝土層図・遺物出土状況実測図 (1/60) . . . . .	19
第 11 図	1 号溝出土土器実測図その① (1 / 3) . . . . .	20
第 12 図	1 号溝出土土器実測図その② (1 / 3) . . . . .	21
第 13 図	1 号溝出土土器実測図その③ (1 / 3) . . . . .	22
第 14 図	1 号溝出土土器実測図その④ (1 / 3) . . . . .	23
第 15 図	包含層等出土土器 (1～4)、溝 1 出土土製品 (5) 実測図 (5 は 1 / 2、他は 1 / 3) . . . . .	25
第 16 図	久路土高松遺跡第 2 次調査全体図 (1 / 500) . . . . .	27
第 17 図	久路土高松遺跡第 2 次調査 I・IV 区遺構配置図 (1 / 300) . . . . .	28
第 18 図	久路土高松遺跡第 2 次調査 II・III 区遺構配置図 (1 / 300) . . . . .	29
第 19 図	1 号竪穴住居跡、1～10 号土坑実測図 (1 号住居跡は 1 / 60、他は 1 / 40) . . . . .	32
第 20 図	11～15 号土坑実測図 (1 / 40) . . . . .	33
第 21 図	各遺構・その他出土土器 (2・4～6・10～17 は 1 / 4、ほかは 1 / 3) . . . . .	38
第 22 図	遺跡出土鉄器・石器実測図 (1 / 2) . . . . .	39

# I はじめに

## 1 調査にいたる経緯

福岡県道 32 号犀川豊前線は、福岡県豊前市八屋から同京都郡みやこ町犀川帆柱へと至る主要地方道である。旧県道 32 号豊前甘木線の一部（野峠－みやこ町犀川帆柱間）が国道 500 号線として取り扱われることとなったのに伴い、1993 年 4 月 1 日に路線認定され、豊前市から求菩提山を経由してみやこ町域へと至るルートとして整備が行われてきた。

現在、犀川豊前線は国道 10 号線バイパス千束交差点から求菩提山麓へと延びる低丘陵である千束原丘陵の上を南北に走っているが、九州島の東側を南北に貫く高規格幹線道路として整備が進められている東九州自動車道の豊前市域における中心的なインターチェンジとして計画されている（仮称）豊前 I.C. への接続路として、新たに現在の犀川豊前線の東側をこれに並行して国道 10 号線から延びるバイパスが計画された。この計画に伴い、開発部局である福岡県豊前土木事務所（平成 22 年度より行橋土木事務所と合併して京築県土整備事務所となった）から埋蔵文化財の有無に関する照合があり、福岡県教育委員会では平成 21 年度に建設予定地のうち久路土地内の一部について埋蔵文化財の試掘調査を行った。

試掘調査の結果、うち 2 地点について埋蔵文化財が包蔵されていることを確認したため、県道野地塔田線より北側の包蔵地については平成 21 年度に、南側の包蔵地については 22 年度に発掘調査を行うことで開発部局との合意に達した。福岡県教育委員会でも、平成 23 年度の組織改革により埋蔵文化財調査業務全般が福岡県教育委員会総務部文化財保護課より九州歴史資料館へと移管されたため、平成 21～22 年度の発掘調査は教育委員会総務部文化財保護課が行い、平成 24 年度の整理・報告書作成業務は九州歴史資料館において行われることとなった。

## 2 調査の経過

**久路土芝掛遺跡** 以上のような経緯により、まず平成 21 年度に福岡県教育委員会総務部文化財保護課が担当部局となって県道野地塔田線より北側の埋蔵文化財包蔵地に対する発掘調査を行った。調査対象地の西側隣接地は、かつて豊前市教育委員会により圃場整備事業に先だって発掘調査が行われており、「久路土芝掛遺跡」として報告され、また埋蔵文化財包蔵地区に登録されていた。このため、県道犀川豊前線バイパス建設に伴う調査地を、久路土芝掛遺跡の第 2 次調査区とした。

久路土芝掛遺跡第 2 次調査区における発掘調査は、平成 21 年 12 月 21 日より開始した。まず重機を用いて表土剥ぎを行ったところ、水田耕作土・水田床土の直下に均質な黒色粘砂質土層を検出した。この黒色土は、下層に行くにつれて色調を薄めて灰黄褐色粘砂質土へと変化していたが、その途中で明らかに遺構内に包蔵されていたであろう多量の土器が出土した。このため、この黒色粘砂質土層は攪乱を受けておらず、その上面が遺構面であることが考えられた。しかし、上面をいくら精査しても遺構の範囲を確定することができなかった（遺構埋土が地山である黒色の粘砂質土層と非常によく似た土質からなっており、この段階では両者の区別が困難であったことが後に判明した）ため、やむを得ず地山である黒色粘砂質土層を少しずつ除去して遺構の範囲が目視できる高さまで遺構検出面を下げることにした。

遺構検出面を下げるにしたがって地山の色調が漸移的に明るくなってくると、ようやく遺構埋土

と地山の区別が可能になってきたため、遺構検出面を確定して表土剥ぎを進めた。この作業に伴って、未調査のまま失われた遺構もわずかながら存在したことと思われ、調査地の土壌条件からすればやむを得ないことであつたと思われるが、残念なことではあつた。

表土剥ぎがおおよそ終了して、年が明けた平成22年1月8日より人力による遺構の検出作業を始めた。検出作業は北から進めたが、おおよそ半分ほど検出を行った時点で、土坑数基と竪穴住居2棟、溝1条を検出した。特に調査区の中央やや北側で検出した溝は幅約2mで大量の土器が検出面に露出しており、調査に時間がかかることが予想された。このため、このあとは遺構の検出と掘削を同時並行で進めることとした。

調査区からはこのほか多量のピットなどが検出されたが、遺構の分布密度は北側の大溝の近辺が最も高く、南側に移るにしたがって薄くなっていく状況であつた。このため、発掘調査は順調に進展した。主要な遺構を完掘して調査区全体をラジコンヘリコプターによる空中写真撮影によって記録したのが3月12日、その後下層遺構の掘削や図面作成作業などを行い、現地における人力作業の全てを3月24日に終了した。その後重機による調査区の埋め戻し作業や、ユニットハウスなど設備の撤収を行い、発掘調査における現地作業は3月30日に全て終了した。

出土遺物や図面・写真等の記録類は調査後全て九州歴史資料館に搬入した。平成24年4月より九州歴史資料館にて小池史哲の指導の下に出土遺物の整理作業を行った。報告書作成作業は小澤が担当して同年度中に行った。

**久路土高松遺跡** 平成22年度の事業範囲は県道野地塔田線以南であり、発掘調査は引き続き教育庁総務部文化財保護課が担当した。

調査対象地周辺は、かつて豊前市教育委員会により圃場整備事業に先立って発掘調査が行われており、「久路土高松遺跡」として埋蔵文化財包蔵地図に登録されていた。このため、県道犀川豊前線バイパス建設に伴う調査地を、久路土高松遺跡の第2次調査区とした。

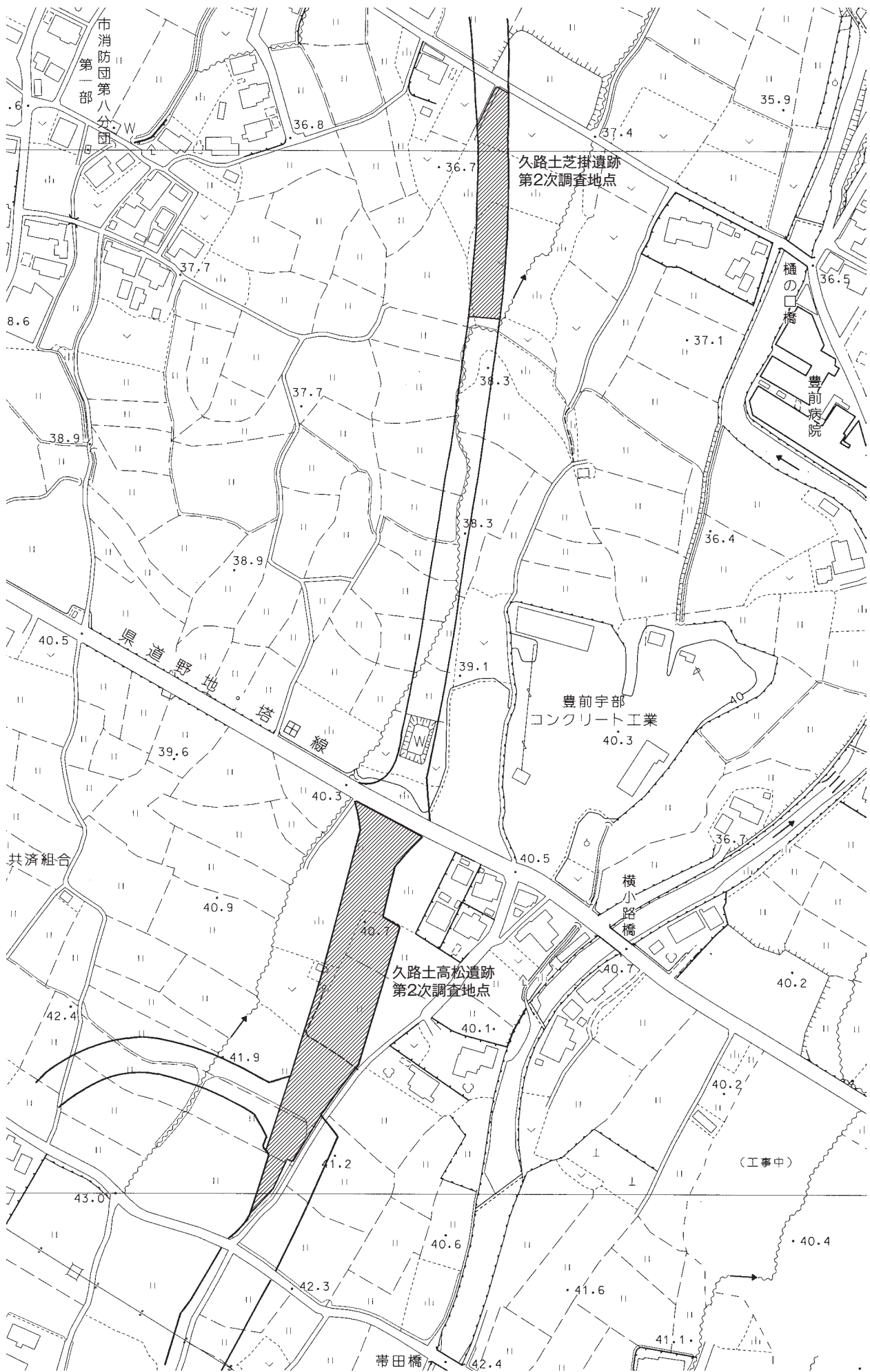
久路土高松遺跡第2次調査区における発掘調査は、8月24日より開始した。調査区は石垣や水路によって4つに分割されており、もっとも北側の本線部分をⅠ区、その南側をⅡ区、もっとも南側をⅢ区、北側の主要本線部分の東側をⅣ区とした。調査はまずⅠ区の表土剥ぎより開始した。

表土剥ぎを始めたところ、Ⅰ区の北側端部は県道野地塔田線に向かって急激に地山面が下がっていくことが判明した（これは県道野地塔田線の北側の試掘調査で深い谷を検出した状況ともよく整合していた）。このため、調査区の北端部は表土剥ぎを途中でやめることとし、現地表面からの傾斜路として整備した。Ⅰ区の表土剥ぎは9月17日まで続けられた。

表土剥ぎに並行して8月27日より人力による遺構の調査に着手した。Ⅰ区北側の地山は明黄褐色粘砂質土からなる堅固な地盤であり、そこに主に黒褐色粘砂質土により埋土が構成される遺構群が掘り込まれていたが、遺構密度は比較的低かった。Ⅰ区の中央から南側には黄褐色砂質土の中に人頭大の礫を多く含むより堅固な地山が広がっており、さらに遺構密度は低くなっていた。そうした中で、数基の土坑と溝、ピットなどを検出し、調査を行った。10月14日にはⅠ区の全体の空中写真撮影を行い、その後遺構の切り合いベルトを外したり残っていた図化作業を行うなどして、10月20日にはⅠ区の調査を全て終了した。

Ⅰ区の調査に引き続いて、Ⅰ区の表土置き場として使っていたⅡ・Ⅲ区の表土剥ぎを行った。人力による遺構検出は10月26日より行った。Ⅱ・Ⅲ区の遺構検出面はⅠ区よりも0.8～1.5mほど高いため、Ⅰ区よりも遺構の残存状況が良いものと期待されたが、Ⅱ区の地山もⅠ区の南側と同様の砂礫土であつて遺構密度は低く、Ⅱ区よりさらに遺構検出面が高いⅢ区において、Ⅰ区北端と同





第1図 調査区位置図(1 / 2,500)

様の明黄褐色粘砂質土からなる良好な地山を検出し、土坑や竪穴住居跡などが見つかった。ただし、I区と比べ調査区が狭く、人力による調査は1ヶ月弱ほどで終了し、11月16日に空中写真撮影を行った。その後図面作成作業などを行う一方、これに並行してIV区の調査を行ったが、こちらからはピットが数基見つかったのみで他に遺構はなく、早々に調査を終了して埋め戻した。

久路土高松遺跡の発掘調査における現地での人力作業の全てが11月30日に終了した。その後重機による調査区の埋め戻し作業や、ユニットハウスなど設備の撤収を行い、発掘調査における現地作業は12月9日に全て終了した。

出土遺物や図面・写真等の記録類は調査後全て九州歴史資料館に搬入した。平成24年4月より九州歴史資料館にて小池史哲の指導の下に出土遺物の整理作業を行った。報告書作成作業は小澤が担当して同年度中に行った。

### 3 調査の組織

発掘調査(平成21・22年度)および整理・報告書作成(平成24年度)の関係者は下記の通りである。平成23年度以降は組織改革により、埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管されている。

総括	平成21年度	平成22年度		平成24年度
文化財保護課長	平川 昌弘	平川 昌弘	九州歴史資料館長	西谷 正
副課長	池邊 元明	伊崎 俊秋	副館長	篠田 隆行
参事兼課長技術補佐	小池 史哲	小池 史哲		
	伊崎 俊秋			
課長補佐	前原 俊史	日高 公德		
庶務				
管理係長	富永 育夫	富永 育夫	総務室長	圓城寺紀子
事務主査	藤木 豊	藤木 豊	企画主査	長野 良博
主任主事(庶務担当)	近藤 一崇	近藤 一崇	事務主査	青木 三保
主任主事	野田 雅	野田 雅	主事	谷川 賢治
	仲野 洋輔	仲野 洋輔	主任主事	近藤 一崇
調査・報告				
調査第一係長	吉村 靖徳	吉村 靖徳	文化財調査室長	飛野 博文
技術主査	齊部 麻矢	齊部 麻矢	文化財調査室長補佐	吉村 靖徳
	岸本 圭	岸本 圭	文化財調査班長	小川 泰樹
主任技師		宮地聡一郎	参事(整理担当)	小池 史哲
主任技師(調査担当)	小澤 佳憲		技術主査(調査担当)	小澤 佳憲
調査第二係長	飛野 博文	飛野 博文		

なお、発掘調査にあたっては、地元豊前市とその周辺より多くの方々が作業員として参加され、寒風吹きすさび、雪のちらつく中、熱心に作業にあたられた。また、発掘調査中には、豊前市教育委員会教育課・京築教育事務所・豊前土木事務所・京築県土整備事務所にさまざまにご協力いただいたほか、地元の方々のご理解・ご協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

**遺跡の位置** 久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡は、ともに豊前市久路土に所在する。大字久路土は「くろつち」と読み、広域地域名称としては「黒土」の字が今も一部で使われている。周囲の水田地帯には火山灰が黒色化したいわゆる「クロボク土」が広く分布しており、これが地名の由来と考えられる。久路土地区は豊前市の中央部やや東側にあり、市街地から車で約10分ほどの田園地帯である。

遺跡の所在する豊前市は、福岡県東部に位置する。旧国では豊前国に含まれ、面積約110km<sup>2</sup>、人口約2万7千人を擁する地方都市として、行橋市とともに福岡県東部のいわゆる「京築」地域の中心的存在である。また同時に、山国川流域に形成された海岸平野であって周防灘沿岸平野の一つに数えられる豊前中津平野の西端部に位置し、上毛町・吉富町を挟んで東接する大分県中津市とのあいだに広い商圈を構成していて、経済的な結びつきは大分県中津市との間に強くあるようである。

**遺跡の立地環境** 福岡県豊前市は、周防灘に面した海岸平野である豊前中津平野の北側に位置する。豊前中津平野は、阿蘇山麓から北流して海に注ぐ大小河川（山国川・佐井川・岩岳川など）の解析・堆積作用により形成された平野である。北側を周防灘、南側を英彦山から東に延びる犬ヶ岳山系により遮られていて非常に幅が狭い一方、西側は豊前市と築上郡築上町の間に展開する小丘陵群によって、また東側は耶馬溪山地の北端部に位置する八面山から北に派生した小丘陵群によって区画されており、東西が細長い典型的な海岸平野である。平野の中心部には、平野中でもっとも規模の大きな河川である山国川が景勝地「耶馬溪」から流出して福岡・大分県境を流れており、これを中心としたひとつの地理的まとまりを形成しているともいえる。

豊前中津平野の地質的基盤はおもに、洪積堆積物（低平地）と阿蘇火山噴出物（丘陵地、山地など）からなり、特に平野の東側については、佐井川・岩岳川などといった小河川とその支流によって阿蘇噴出物の堆積した緩斜面が解析されることによって南北方向に幾条もの低丘陵が連続するとともに、その間に不定形な扇状地が形成されている。ただし、これらの小丘陵間の低地群のうち、現在も小河川として北流する上記のような数条の河川を除く小さな帯状低地の多くは、圃場整備事業により一面の水田地帯へと姿を変えており、現在ではもはや目にはできない。

久路土地区は、近世後期に築港され現代まで豊前地域の物流拠点として大きな役割を果たしている宇島港から、中・近世修験道の一大拠点として栄えた求菩提山へと南北にまっすぐ延びる千束原丘陵と、その東側に犬ヶ岳山系から流出して北流し周防灘に注ぐ小河川である岩岳川、またさらにその東側を北流する佐井川のあいだに広がる平野地帯のうち山麓と海岸のちょうど中央部に位置する扇状地と理解できる。しかし細かく見れば、扇状地堆積物は埋没小谷の基盤に見られるのみで、埋没低丘の基盤層は阿蘇溶岩や隆起洪積層から構成されており、黒土地区の内部にも、今は見られないこのような埋没低丘・埋没小谷が実に細かく入り乱れながら展開していた。久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡はともに、基盤層を隆起洪積層としてもつ埋没低丘の上に立地している。遺跡はともに埋没低地によって周囲を取り囲まれて南北方向に帯状に延びる微高地上にあり、周囲は礫層を基盤層とする水はけのよい扇状低地であったと考えられる。遺跡に住んだ人々は、このような土地環境の中から狩猟採集や水田耕作の適地を探し出しつつ、生活を営んだものであろう。

## 2 歴史的環境

調査地周辺においては旧石器時代から近代に至るまで多種多量の埋蔵文化財が眠っていることがこれまでの発掘調査により徐々に明らかになってきている。以下、主要な事例について時代を追って見ていきたい。

**旧石器時代** 旧石器時代の資料についてはいまだ散発的な出土状況であるが、後期旧石器時代に属する資料がいくつか見つかった。青畑向原遺跡では、黒曜石製・水晶？製のナイフ形尖頭器と安山岩製の薄片尖頭器などが計18点出土している。細石刃文化期の貴重な資料であり、豊前市内では唯一のある程度量的にまとまった資料である。このほか、薬師寺塚原遺跡から三稜尖頭器が1点出土している。

**縄文時代** 豊前市役所近くの吉木遺跡から、早期押型文土器の資料が包含層からある程度まとめて出土している。押型文の種類には山型・格子目・楕円型などが見られ、稲荷山式土器の特徴を持つものが大半を占める。ほかに塞ノ神式土器に属する可能性のある条痕文土器等も出土している。すぐ近くにある吉木常末遺跡からはやはり早期に属するとみられる土器・石器が出土している。早期から前期にかけてのある程度まとまった資料は豊前市内ではいまだ他になく、貴重な例である。

小石原泉遺跡では、縄文時代後期後半から晩期前半にかけての竪穴住居跡2棟が調査された。遺物の分布状況から、調査では集落の一部を確認したもので、集落は南側などに広がる可能性が高いと考えられる。遺跡からは他に西平式期から晩期中葉頃までの土器が出土しており、集落の存続幅の一端を示すものとされている。他に小石原泉遺跡からは縄文時代早期・前期・中期の資料が散発的に確認されている。

ほかに、豊前市西側の中村石丸遺跡や隣接する築上町山崎・石町遺跡などで後期の集落跡が調査され、この時期の資料がまとめて報告されている。

縄文時代晩期になると資料数は急減し、豊前市域でのまとまった報告はいまだない。周辺地域の状況も勘案すると、おそらく集落数としても減少していくのであろうが、様相は不明である。

**弥生時代** 弥生時代初期の資料としては河原田塔田遺跡から刻目突帯文土器を出土する円形プランの住居跡が1棟発見されている。甕の胴部屈曲が明瞭で、刻目突帯が口縁端部よりやや下がった位置につくなど、夜臼Ⅰ式併行期の様相を示す。遺跡自体は標高50m以上をはかる扇状地上位に立地しており、水稻農耕を積極的に取り入れた集団と評価するにはややためらいがある。

前期の資料もまとまったものはないが、上述の河原田塔田遺跡から前期末前後に属する板付系甕などが出土しているほか、表採資料として永久遺跡・昭和町遺跡・東風ノ風遺跡・開立寺遺跡などが知られる。いずれも前期後半～末の資料である。

中期になると資料は急激に増加し、まとまった資料も見られるようになる。上述の河原田塔田遺跡では、前期末～中期末頃と考えられる墓域が調査された。墓制は土壙墓（配石土壙墓・石蓋土壙墓などを含む）を主体としており甕棺墓は見られない。土壙墓中から細型銅剣の切っ先が出土しており、注目される。西側に隣接する河原田善丸遺跡・河原田四ノ坪遺跡では、おおよそ同時期と考えられる集落が見つかり、河原田善丸遺跡では円形住居跡が7棟、河原田四ノ坪遺跡では同じく5棟確認されている。河原田塔田遺跡の墓域を営んだ人々の居住域と考えられ、墓域と居住域がセット関係でとらえられる貴重な資料である。

鬼ノ木四反田遺跡では、中期～後期の大規模な集落が調査され、竪穴住居跡36棟、貯蔵穴300基以上が発見された。出土遺物に特徴があり、中期前半に属する銅鉞（ヤリガンナ）、後期に属す



- |           |            |            |             |            |
|-----------|------------|------------|-------------|------------|
| 1 久路土芝掛遺跡 | 8 今市向野遺跡   | 15 大村古賀遺跡  | 22 西ノ原遺跡    | 29 河原田塔田遺跡 |
| 2 久路土高松遺跡 | 9 荒堀中ノ原遺跡  | 16 青畑向原遺跡  | 23 時末遺跡     | 30 鬼木鉾立遺跡  |
| 3 昭和町遺跡   | 10 大村天神林遺跡 | 17 旭城跡     | 24 塔田琵琶田遺跡  | 31 緒方古墳群   |
| 4 吉木遺跡    | 11 大村城跡    | 18 黒土城跡    | 25 永久笠田遺跡   | 32 小石原泉遺跡  |
| 5 吉木常末遺跡  | 12 大村車地遺跡  | 19 久路土六田遺跡 | 26 永久遺跡     | 33 薬師寺塚原遺跡 |
| 6 吉木穴井遺跡  | 13 大村石畑遺跡  | 20 下大西遺跡   | 27 河原田善丸遺跡  |            |
| 7 下原遺跡    | 14 大村上野地遺跡 | 21 大西遺跡    | 28 河原田四ノ坪遺跡 |            |

第2図 遺跡の位置と周辺の歴史的環境 (1 / 25,000)

ると考えられる銅鏃・中広形銅戈・小形仿製鏡など多種多様な銅製品が同一遺跡内から出土する例は京築地域では他に例を見ない。

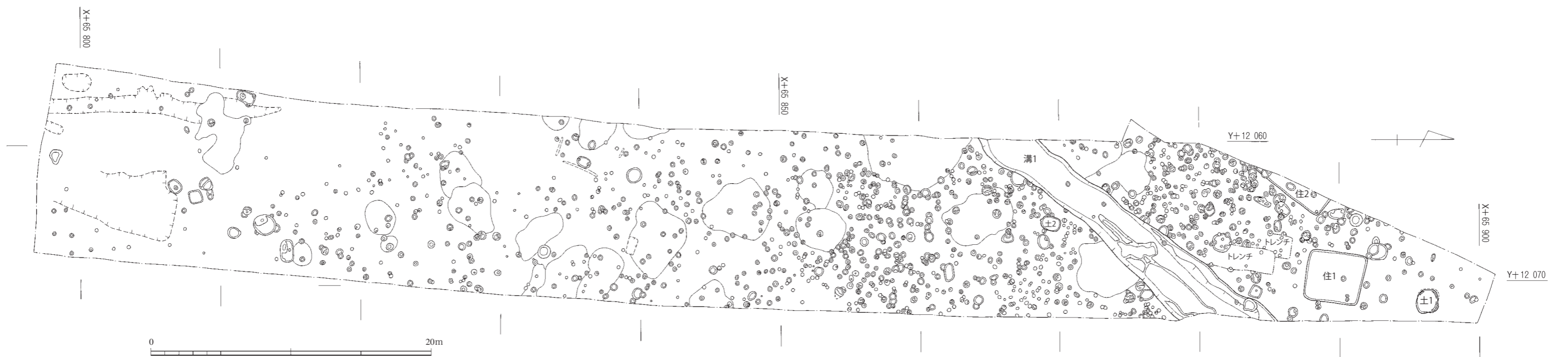
後期にはさらに遺跡の数は増す。140棟もの竪穴住居跡を調査し、舶載鏡などが出土した小石原泉遺跡をその代表格として、大西遺跡・中村団後遺跡・久路土六田遺跡などでこの時期の集落跡が見つかっており、鬼木鉾立遺跡からは銅矛の耳部が出土するなど多様な成果が上げられている。調査地の南西に近接する西ノ原・大西遺跡群では最近、後期後葉に掘削され、古墳時代前期に埋没したと考えられる環濠が調査され、またその東に隣接する塔田琵琶田遺跡では後期に舶載されたと考えられる鏡を材料にした破鏡が2点出土するなど、新しい調査成果も蓄積されており注目される。

**古墳時代** 古墳時代前期には、上述の小石原泉遺跡、塔田琵琶田遺跡、西ノ原・大西遺跡群などで数十棟を超える規模の集落が調査されている。中期の資料は少ないが、後期になると再び集落数の増加と規模の拡大が見られ、上述3遺跡のほかに荒堀中ノ原遺跡等で6世紀代を中心とし、一部7世紀中葉に及ぶ集落が数多く調査されている。塔田琵琶田遺跡や小石原泉遺跡、永久遺跡などでは、カマドの煙道が住居の壁に沿って横に延びる、いわゆる「オンドル状煙道カマド」などと呼ばれる、渡来系とされる遺構を持つ資料も多く見られ、後述の古代における戸籍資料との関連で注目される。

**古代** 古代に入ると、集落数は多いものの集落の規模は縮小する。小石原泉遺跡・塔田琵琶田遺跡・久路土六田遺跡など、それまで断続的に集落が見られた遺跡で再び小規模な集落が営まれるほか、吉木遺跡などでも小規模な集落がみられる。いずれも一辺3m以下のサイズの小型の竪穴住居跡でコーナー部にカマドを作り付ける特徴的な住居跡が見ついている。古代においては、大宝二年(702)豊前国戸籍の断簡が正倉院に残され、そこに渡来系の姓を持つ人々の名が多く記されていることはよく知られている。上述の特徴的な住居跡はまさにこの時期あるいはその直前にあたり、何らかの関係が注意されるところである。

**中世** 中世の本地域は、鎌倉時代に下野国から仲津郡城井郷に地頭職として赴任した宇都宮氏一族(後に豊前守護職)により支配された。調査地の近隣には、宇都宮氏の一族により営まれた城館跡が散在する。調査地の西側に位置する大村城は、豊前市河内にある山田城跡を拠点として豊前市大村・山田周辺を支配した山田氏の抱城とされ、大村天神林遺跡・大村石畑遺跡では中世の城館関連遺構や多様な遺物が、また北東の大村車地遺跡では小規模居館の可能性のある方形地割が調査されている。宇都宮氏は戦国末期に中津に赴任した黒田孝高との争いの中で謀略により滅亡したことは今でも語り継がれる悲劇である。

**近世** 久路土地区は当初小倉小笠原藩、後に小倉新田藩(千束藩)に属し、小笠原氏の支配を受けた。この時期の遺跡の調査例としては市丸城居屋敷遺跡が重要である。市丸城居屋敷遺跡は中世末期、大内氏配下の野田氏により居館が営まれたあと、近世には富裕層の居住する集落になったと考えられる遺跡で、近世期の多種多様な遺構・遺物が出土しており注目される。このほか調査地点の北西約600mほどの地点には、日本で最も新しい近世城郭といわれ、明治3年に小倉藩が長州藩の侵攻に対抗すべく建設した旭城跡があり、現在でも千束小学校や隣接する神社に当時の石垣がよく残るほか、城下町の武家屋敷も若干ではあるが残されている。近世末期に築かれ、近代にかけて京築地方の海の玄関口として大いに賑わった宇島港にも近く、近世～近代の歴史探訪の材料には事欠かない地域である。



※細い実線でアメーバ状に囲った部分は全て風倒木痕である。

第3図 久路土芝掛遺跡第2次調査遺構配置図(1 / 300)

### Ⅲ 調査の報告

#### 1 久路土芝掛遺跡第2次調査の報告

##### (1) 調査の概要

**調査区の概要** 調査区は、既述のように南北長約100mに対して東西幅は12～13mという非常に細長い形を示す。調査区全体は、南北にやや幅広く延びる微高地の上に位置しており、連続した一連の地形を示している。なお、調査区の東側水田では豊前市教育委員会により圃場整備事業に伴う発掘調査が行われているが、この成果によれば東側50m以上にわたってこの微高地は広がっており、おそらく東側端部は岩岳川により形成された河岸断崖まで到達しているであろう。一方、西側はそれほど広がっているとは考えにくく、圃場整備前の旧地割を勘案すれば調査区のほぼ西側隣接地に浅い谷状地形が存在した可能性が高い。実際、今次調査でも調査区の最南端部で遺構面がやや西側に傾斜している状況が確認でき、おそらく本地点がこの微高地の西側端部になるものであろう。

遺構の大半は調査区の北側に集中しているほか、全域に分布する多数のピット群も北側に行くほどにその分布密度を増す傾向にある。このような遺構の分布傾向に伴い、出土遺物は調査区の南側ではほぼ全く出土せず、ほぼ全てが北半部から出土している。

**調査区の基本土層** 調査区の表土は上から順に耕作土、水田床土（人為的な貼り土）からなり、水田床土の直下が地山であって真っ黒でやや砂質分の多い粘砂質土から形成されていた。「久路土（黒土）」地区名の語源となったクロボク土である。この黒色土は、下層にいくほどに白色味を帯び、さらに徐々に黄褐色へと変化するとともに砂質化し始め、また遺構面から約30～40cmほどの高さから徐々に礫が混ざり始める。遺構面より60cm以上下がると明黄褐色砂質土の間に多量の礫が混ざる砂礫土となっていて、非常に固く締めり人力での掘り下げは困難となっている。したがって遺構は基本的にこの礫層より上位に掘られていて、遺構面から深さ60cm以上掘られた遺構はほとんど見られない。なお、調査区の北側では砂礫層が深い場所にあり、南側に行くにしたがって礫層が浅い位置から見られるようになることから、元々の地形は南側に行くに従い高くなっていくもので、それが開墾の過程で水平にならされ、南側が多く削平されたものと考えられ、遺構分布密度の変化もこれに多少の影響を受けている可能性はあろう。ただしもとより北側の方に遺構が多い状況であったろうことは疑いない。

**遺構の検出状況** 地山・遺構埋土がともに黒色であったため両者の区別が非常に困難であり、表土剥ぎ開始時には遺構面を正確に認識することができなかった。このため、重機を用いた表土剥ぎ時には10～20cmほど遺構面を余計に掘り下げてしまった箇所がある。1号溝付近において表土剥ぎ時にかなり高い位置から遺物が非常に密集した状態で検出され始めたため、急遽表土剥ぎを浅い位置で止めることとしたものであり、それより北側では遺構検出面が本来の地山よりもやや低くなっている箇所があることに注意されたい。

**風倒木痕** 調査区の全域にわたって、この地山を切り込む形で風倒木痕と思われる地山の攪乱痕跡が数多く認められた。他の遺構との切り合い関係は全て風倒木痕が古い関係にある。全ての風倒木痕について、検出面から一段下げて遺物の出土の有無を確認したが、遺物の出土が見られなかったため、それ以上の掘り下げを行わず、原則として風倒木痕は地山の一部として扱った。

**検出遺構の概要** 遺構は、地山あるいは風倒木痕を切り込む形で検出された。調査区の北端部において袋状貯蔵穴（1号土坑）が1基、その南側に1・2号住居跡、さらにその南に1号溝が北東か



ら南西に向けて調査区を横切っていた。また、その周囲には多数のピットが群集していたが、建物の抽出はできなかった。

1号溝の南には2号土坑以外には主たる遺構は確認されず、ピットも徐々に分布密度が低くなっていた。調査区の最南端で灰褐色の特徴的な埋土を持つピットがいくつか並んでおり、掘立柱建物かと思われたが、調査区内では1列しか検出できず、柱間の間隔も一定ではないため、簡易的な柵の痕跡であろうと判断した。他の遺構とは埋土が異なることから、新しい時代のものと判断したが、出土遺物はなく時期は不明である。ここでは遺構としての取り扱いはしないので、注意されたい。以下、個別の遺構について解説を加えていく。

## (2) 竪穴住居跡

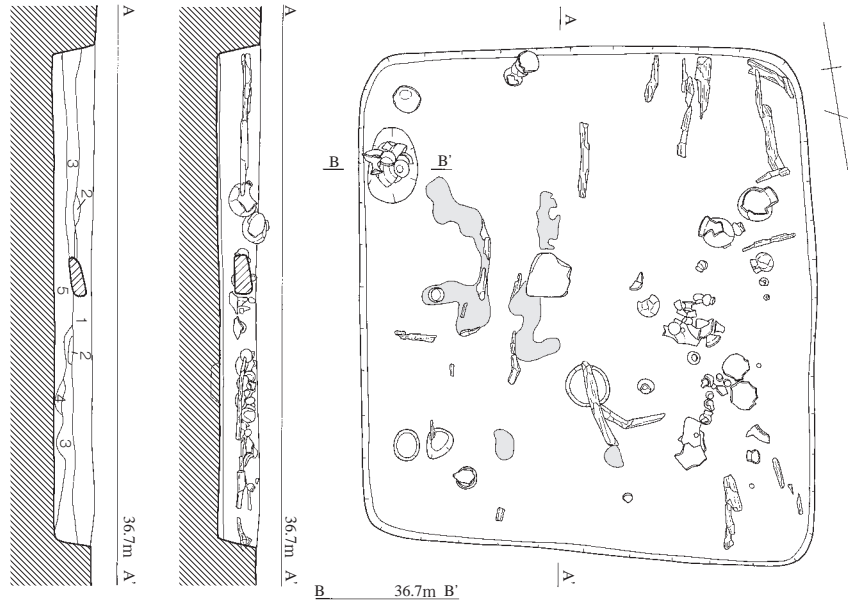
### 1号竪穴住居跡（第4図、図版4）

調査区の北側中央部で検出した方形プランの竪穴住居跡である。南北方向にやや長く4.0m、東西方向が約3.5mの規模をはかる（いずれも床のサイズ、以下同じ）。床面はほぼ水平で残存深さは約30cm、壁溝・炉跡は持たず、支柱穴と考えられるピットも見当たらない。ただし、床面の地山がまだ黒色味を帯びていたという条件下での検出であり、確実にピットを探すのにはやや困難を伴う状況での結果であって、床面をさらに本来の床面よりも下げて再度検出すれば違う結果が得られたかもしれない、悔いが残る。

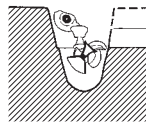
住居内には多量の土器や炭化木材・焼土などが投棄されていたが、これらの遺物はいずれも床面よりも5～10cm以上高い位置にあり、住居が埋まりかけた状態で投棄されたものである。住居埋土はほぼ水平に堆積しており、住居が廃絶後人為的に埋め戻される中で、土器群が投棄され、同時にここで火がもやされたか木材・焼土も廃棄されたものと考えられる。なお、調査途中で住居の南東隅に高坏がほぼ完形で複数個体が重なるような状態で出土したため、掘削途中で周辺を精査したところ、埋土に掘り込み痕跡が見られた。たまたま残っていた土層ベルトにもこの掘り込みの一部が現れており、一方では住居の検出時にこのピットが確認されなかったことから、住居が途中まで埋め戻された後にピットが掘削されて、高坏が計5個体折り重なるように埋められていたと判断できる。出土した高坏自体は住居の他の箇所から出土したものと形式的に時間差はないものと見られ、住居を廃絶し、埋め戻す途中に行われた廃絶祭祀の可能性もある。住居内からは他に手捏ねの小形土器が多く出土しており、住居の廃絶時における何らかの祭祀行為の存在を裏付けるものと見てよからう。なお、本住居跡は出土土器から古墳時代中期前半に位置づけられる。

### 出土土器（第5～7図、図版7～9）

**土師器（1～55）** 1～12は甕型土器である。いずれも球形の胴部と短く外反する口縁部を持ち、胴部外面の調整がハケ目、内面がケズリ、口縁部の内・外面が横ナデ調整で仕上げを行うという共通項を持つ一群である。大きさと口縁部形態にバリエーションがあり、大きさの面では胴部最大径が22cm内外になるものとして1～4・6～8が、同じく20cm内外になるものとして5・9～12があげられる。口縁部の形態では、まず外湾しながら短く伸びるものに1～3が、次にややまっすぐ伸びるものに4・5・10・11が、僅かに内湾傾向を見せるものとして9と12があげられる。内湾傾向を持つものは古墳時代前期布留式の系統に、一方外湾するものは在地系の変容で後の長胴甕へとつながっていくものと推測される。13・14は小形の短頸壺である。胴部は球形を呈し、最大径は約12cmほどをはかる。口縁部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁部は内外面ともにナデ、胴部外面がハケ目、内面には指頭圧痕を残しつつナデ調整を施すのが基本形で、口縁部内・外面に横方向のハケ目

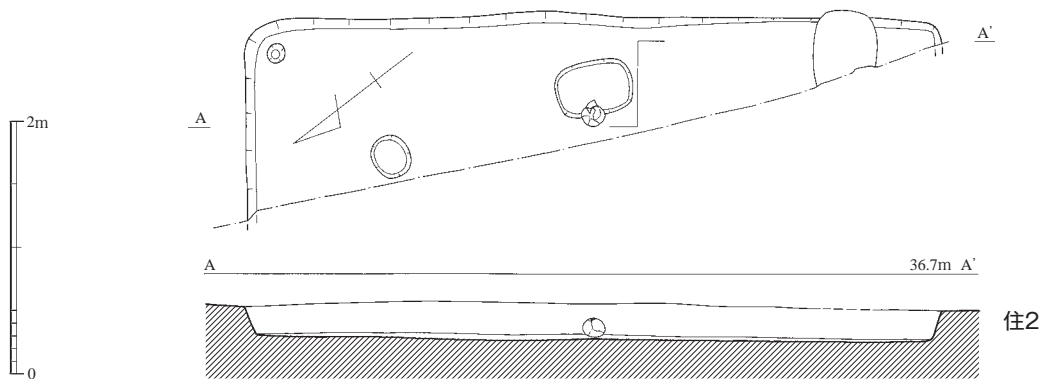


1. 黒色粘質土
2. 赤橙色粘質土、焼土ブロック含む
3. 暗黄褐色粘質土に黄褐色粘質土（地山）  
小ブロックが入る
4. 黒褐色粘質土
5. 黄褐色粘質土に灰褐色粘質土ブロックが入る



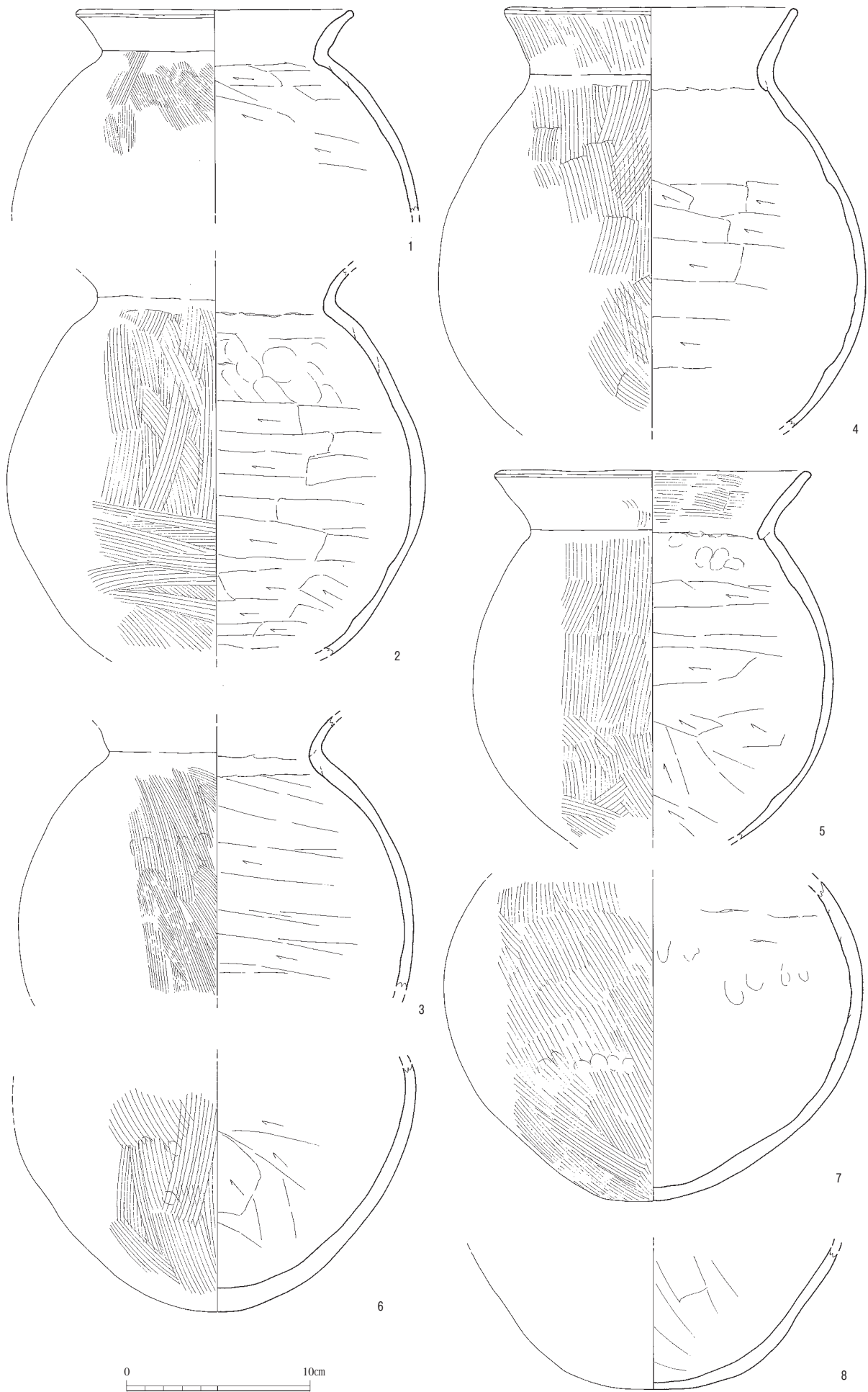
住1

※トーンかけ部は埋土中の焼土

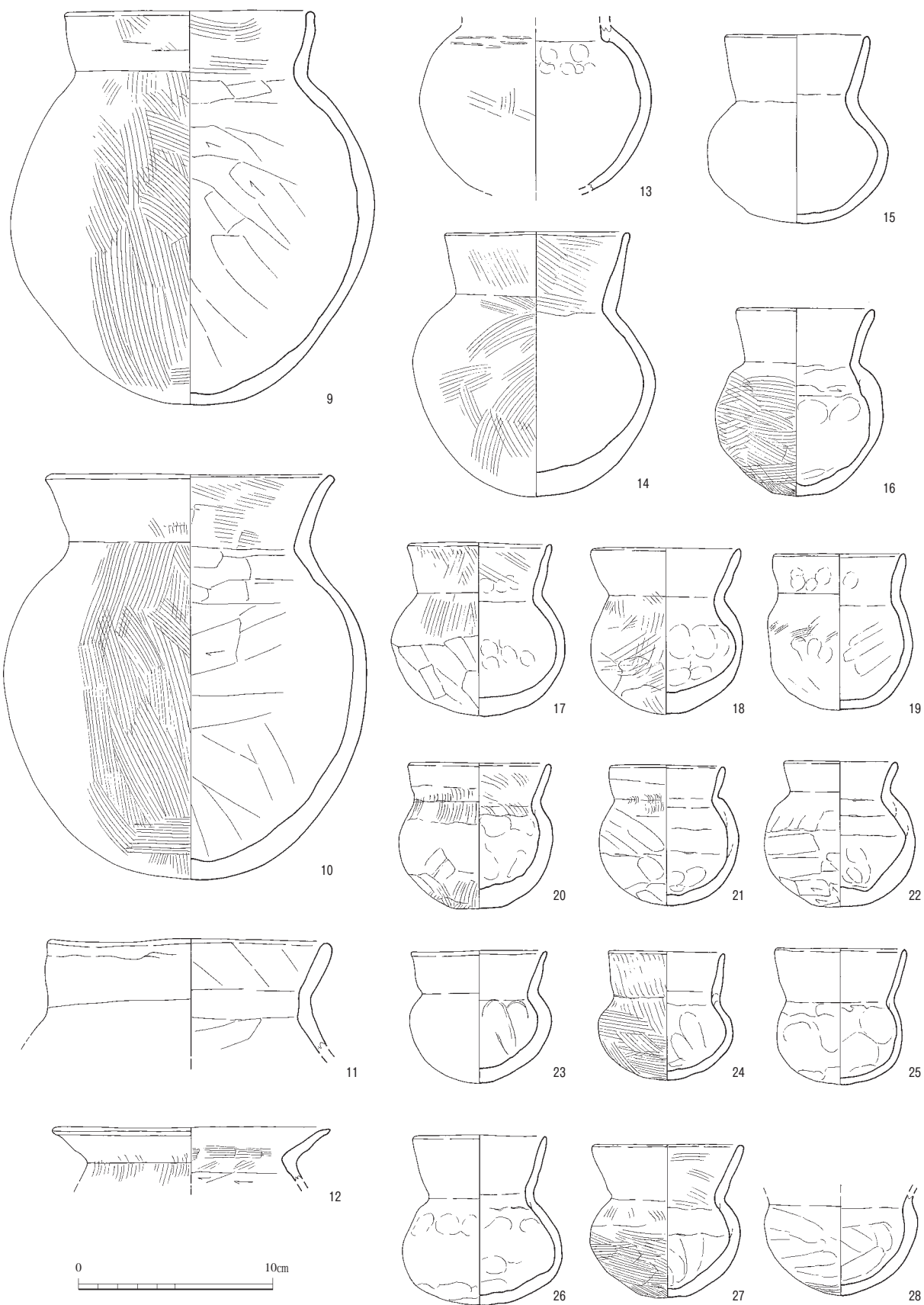


住2

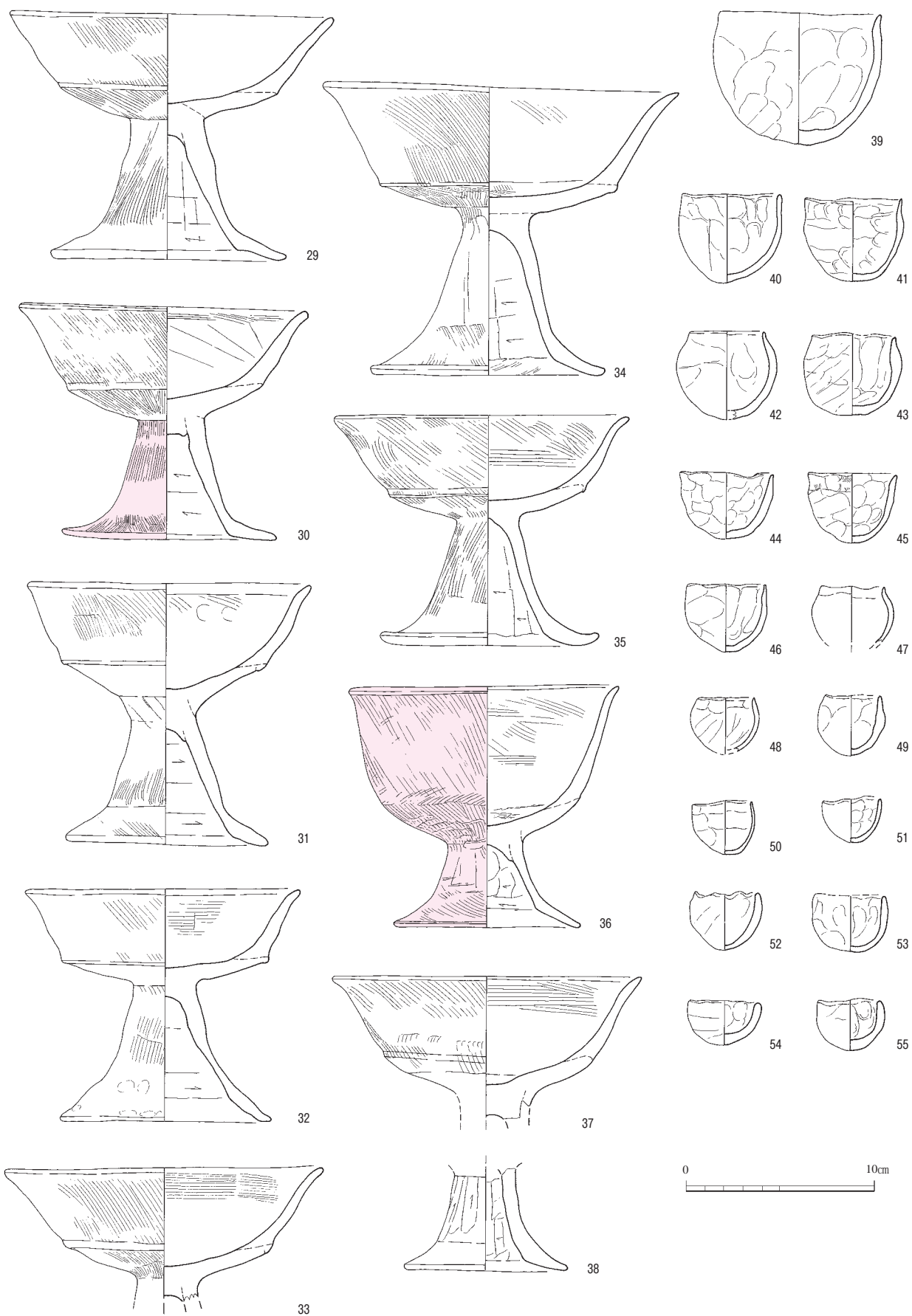
第4図 1・2号竪穴住居跡実測図 (1 / 60)



第5図 1号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1 / 3)

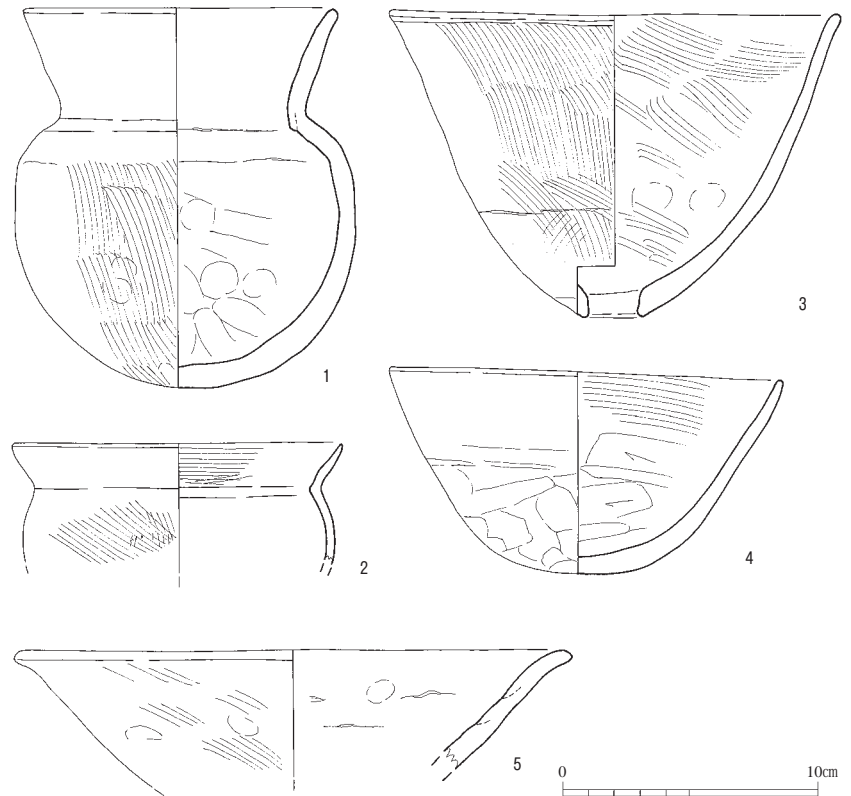


第6図 1号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1 / 3)



第7図 1号竪穴住居跡出土土器実測図その③ (1 / 3)

が残るものが散見される。15～28はいわゆる小形丸底壺の一群である。基本的な形態としては胴部が球形で口縁部は短く直線的に外反し、調整は口縁部が内・外面ともにナデ、胴部外面上半がハケ目で下半が指による強いナデ、内面は基本的に指ナデで成形時の指頭圧痕をよく残すという共通点を持つ。胴部がやや扁平なものとして17・23～28があり、口縁部が僅かに内湾するものとして18・20・25・26などが見られる。大きさは大小二群あり、やや大きめで胴部最大径が8～9cmほどの一群(17～22)と7cm前後の一群(23～28)に分けられよう。29～38は高



第8図 2号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

坏である。坏部は口縁部が直線的に開いて端部が外湾し、屈曲して直線的な基部と接合する。脚部は直線的に開いて最後に屈曲して僅かに外反しつつ接地するのが基本形態である。調整は脚部の外面、坏部が内・外面ともにハケ目調整痕をナデ消し、脚部の内面はヘラ状工具により整形した痕跡をよく残すものが多い。大きさは坏部径がおおよそ14～16cmをはかるものが主体を占め、34のみ20cmを越える大型品である。形態変異は他の器種と比べてやや少ないが、29は口縁部を直線的に伸ばして端部が湾曲しない、36は坏部が深いなどといった個体差も見受けられる。なお、本遺構出土の10個の高坏のうち、上述した住居埋め戻し途中に掘削された埋納ピットから出土したのものとして、29～33の5個体をあげておく。39～55は手捏ねの埴型土器である。大きさは3種みられ、胴部最大径が9cmをはかりもっとも大きな39、同じく5cm内外で中形の40～44、4cm内外で小形の45～55に分けることができる。いずれも球胴を持ち、内・外面ともに指頭圧痕がよく残る。ごく短く外反する口縁部が付く39～50と、付かない51～55があり、後者は球胴というより半球形といった方がいいかもしれない。後者の方が器壁がやや厚く明瞭な指頭圧痕が少なくて一定した厚さを持つ傾向があり、前者が甕、後者が埴をモデルに作り分けられている可能性もあろう。これらの出土土器のうち甕については、口縁部形態に僅かに布留式土器の影響が残るものが見られること、いまだ球胴を呈し長胴化傾向が見られないことから、古墳時代前期に近い中期前葉に位置づけたい。高坏の坏部中位の段が明瞭化すること、小形壺の形態は布留式期のものをおおよそ踏襲しながらも造作が荒くなっていくことなども上記の位置づけの証左となろう。全体的に見て、一括性の高い資料として今後豊前地域南部における古墳時代土器編年の重要な資料となろう。

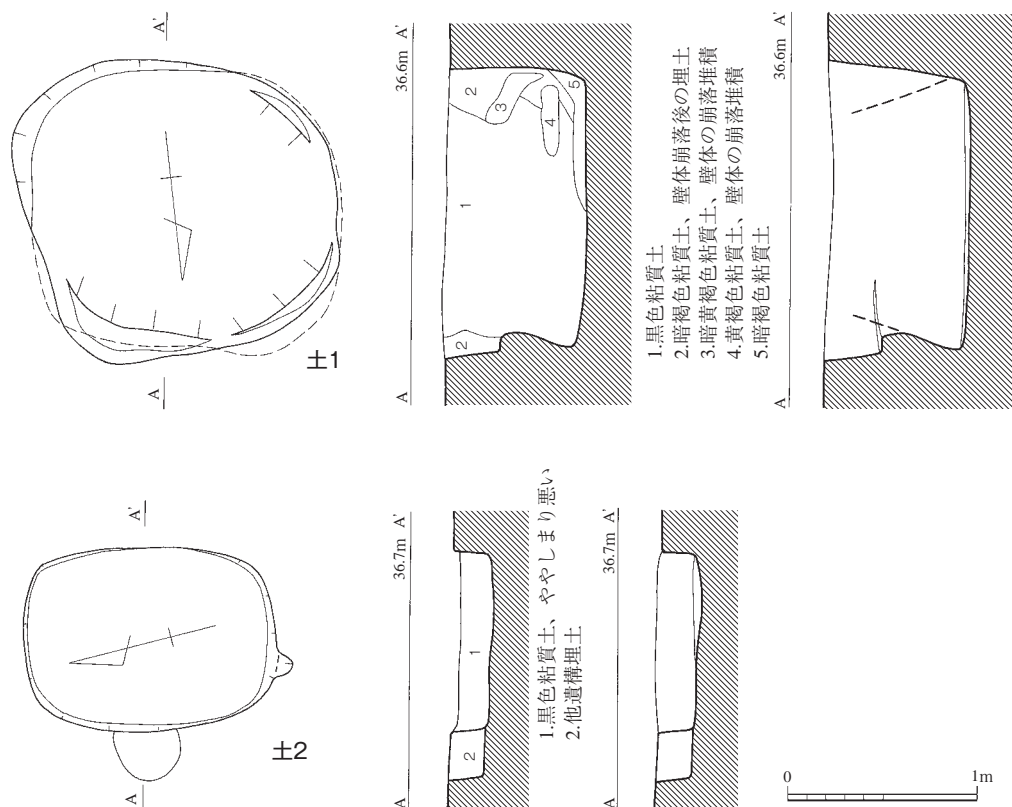
## 2号竪穴住居跡(第4図、図版5)

調査区の北側、西側端部に位置し、大半が調査区外に広がる遺構である。方形プランの東辺が

直線的に伸び、直角に屈曲するところまで確認し、竪穴住居跡と推定した。唯一規模の分かる東辺の長さは5.4mをはかる。深さは約30cm弱が残されていた。床面からは壺型土器が1点完形に近い状態で見つかったほか、埋土からビニール袋1杯ほどの土器が出土した。いずれも土師器である。出土土器から、1号住居跡とほぼ同時期の古墳時代中期前半に位置づけたい。

出土土器(第8図、図版9)

土師器(1~5) 1は短頸壺である。球形の胴部から屈曲してやや長く斜めに直線的に伸びる頸部へといたる。甕のように胴部内面にケズリ調整を施さないため、器壁が厚い。胴部外面には粘土帯接合部を中心に施された指頭圧痕の上から斜め方向のハケ目調整を施すが、粘土帯の接合部が残された凹凸によりよく読み取れる。胴部内面もやはり指頭圧痕を残しつつ指ナデにより仕上げる。口縁部は丁寧なナデ消しを施す。口縁部径12.4cm、胴部最大径15.0cmをはかる。2は小形の甕型土器の口縁部片である。球形の胴部の上半と、僅かに内湾しながら伸びる口縁部が残されている。布留式土器の特徴を口縁部形態に僅かに残すが、口縁端部を丸く収めるなど形骸化が著しい。口縁部径は約13.0cmをはかる。3は甑である。口縁部が直線的に伸びるやや深い鉢形の胴部を持ち、小さな底部に焼成前穿孔を施す。底部から約4cmのところまで外面が変色しており、それより上位は赤白色に器壁が変色している一方下位は黄白色で焼成時の色調を保っている。この部分の外径は約11cmをはかり、2のような小形の甕に乗せられていたものであろう。調整は内・外面ともにハケ目調整、内面はその後多少のナデを施す。口縁部径は17.8cm、器高は約12.0cm、底部穿孔の径は約2cmをはかる。4は小形の鉢である。僅かに湾曲する底部から斜めに直線的に伸び口縁部へといたる器形を持つ。外面下半は指による不規則な方向のナデ、上半は丁寧な横ナデ、内面下半はケズリ、上半はハケ目調整を施す。口縁部径は15.6cm、器高は8.2cmをはかる。5は高坏の坏部片であろう。屈曲部より上位、直線的に開いて最後に外湾する部分が残る。内・外面に指頭圧痕が僅かに残り、



第9図 1・2号土坑実測図(1/40)

内面はその後ナデ仕上げ、外面はハケ目調整を施した後ナデ仕上げ。口縁部径は約 22cmをはかる大型品である。これらの出土土器は古墳時代中期前半の様相を示す。

### (3) 土坑

#### 1号土坑(第9図、図版5)

調査区の北端部に近い箇所検出された、平面円形の土坑である。上面・底部ともに直径は約 1.4mほどをはかるが、後述するように埋土の上半には地山ブロックが倒れ込むように入り、本来は口縁部径が 60cm程度の袋状貯蔵穴であると考えられる。埋土はほぼ全域が地山上部と同じ黒色粘質土からなるが、壁に近い部分や底部付近には地山の中から下位に見られる暗黄～黄褐色粘質土がブロック状に入り込んでおり、崩壊・堆積した様相を示す。出土遺物はなく時期は不明だが、弥生時代前～中期の所産と推定される。

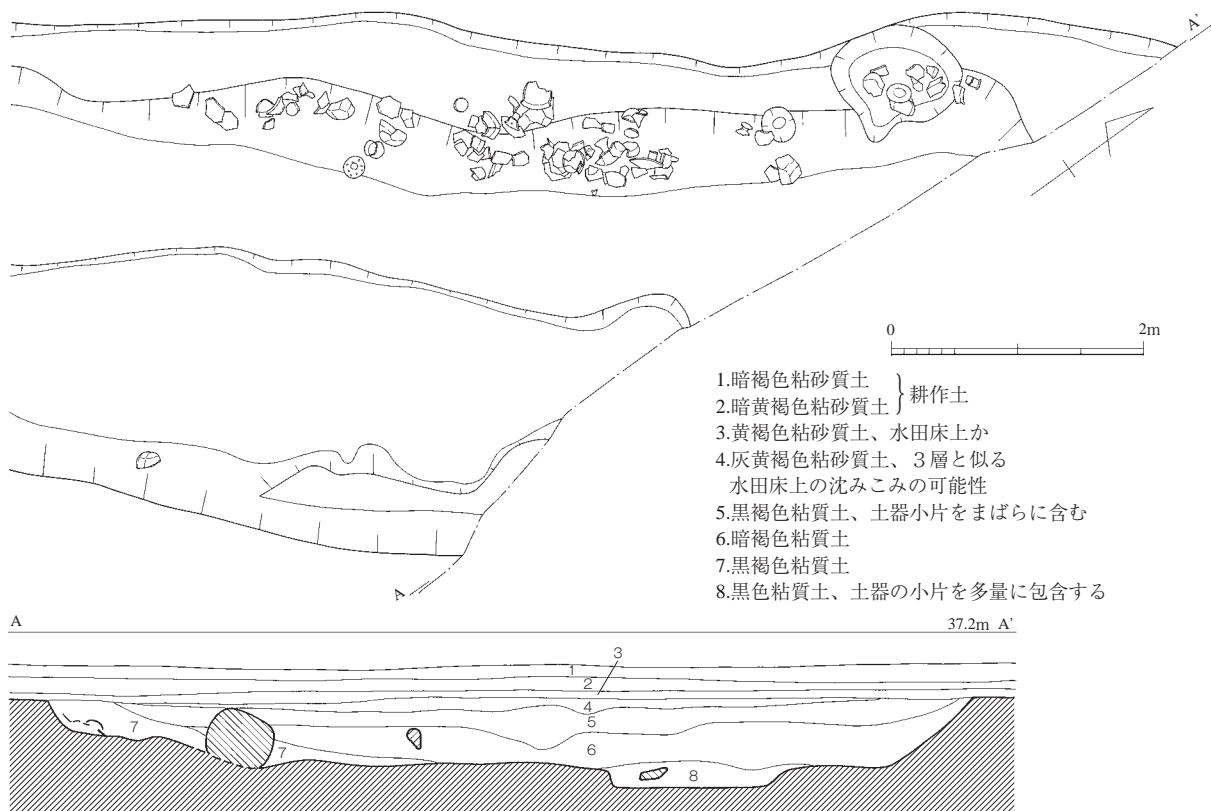
#### 2号土坑(第9図、図版5)

調査区中央部やや北寄りに、無数のピットに囲まれて検出された、平面形が小判状を呈する土坑である。長軸は 1.25m、短軸は 0.95mほどの規模をはかる。壁は直立しており、深さは約 20cmほどが残されていた。出土遺物はなく、時期は不明である。

### (4) 溝

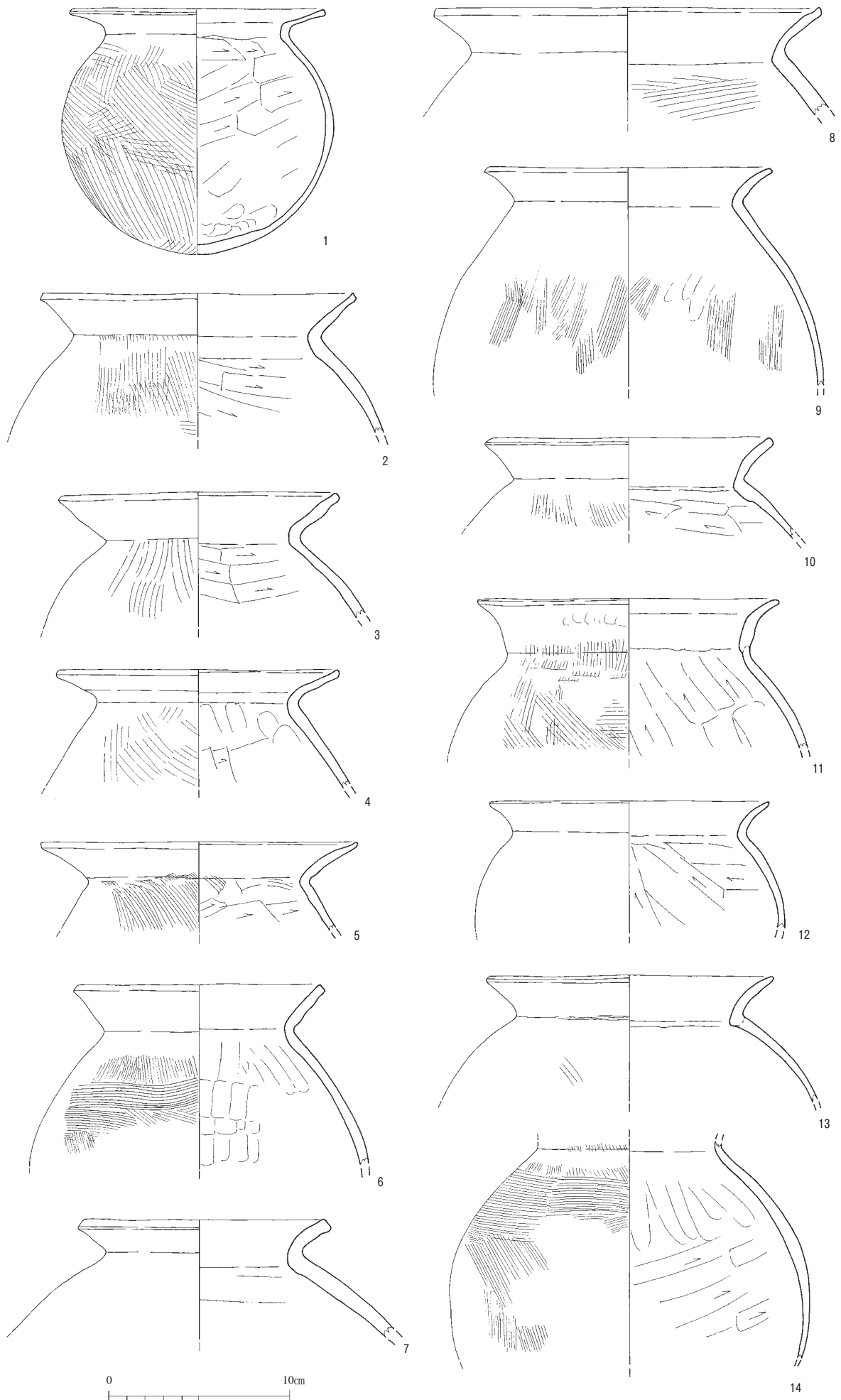
#### 1号溝(第3・10図、図版6)

調査区中央部北寄りを北東から南西に向かって調査区を横断する溝である。調査時には1条の溝として調査したが、出土土器は古墳時代前期後半～中期前半と後期後半の2時期があり、その

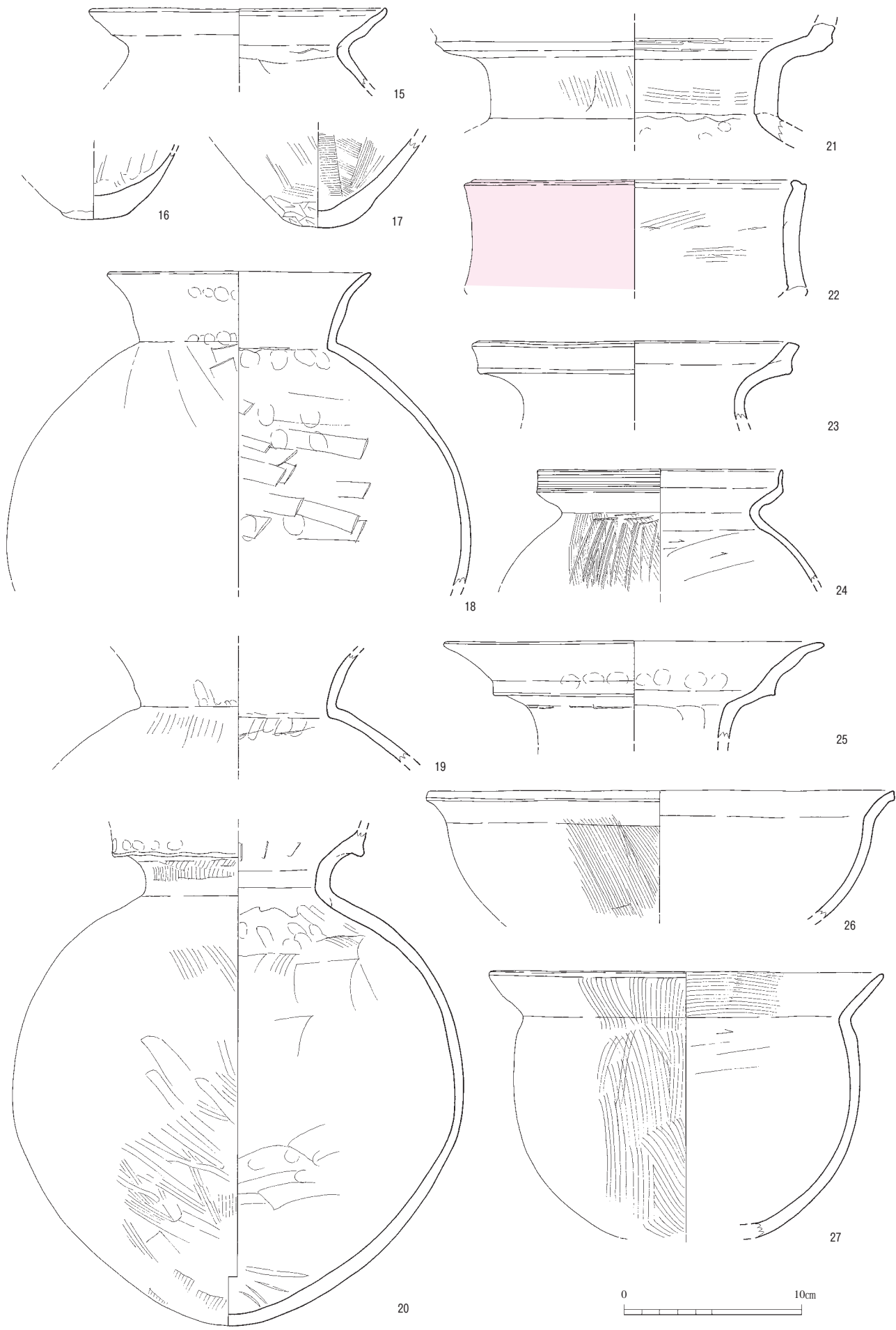


第10図 1号溝土層図・遺物出土状況実測図(1/60)

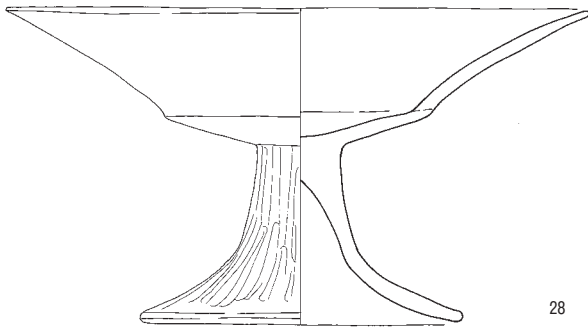




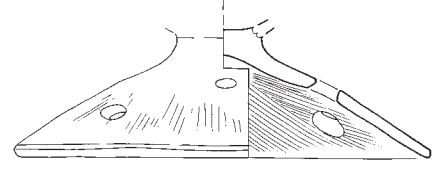
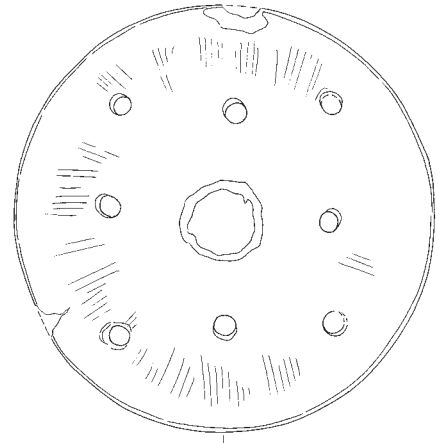
第 11 図 1号溝出土土器実測図その① (1 / 3)



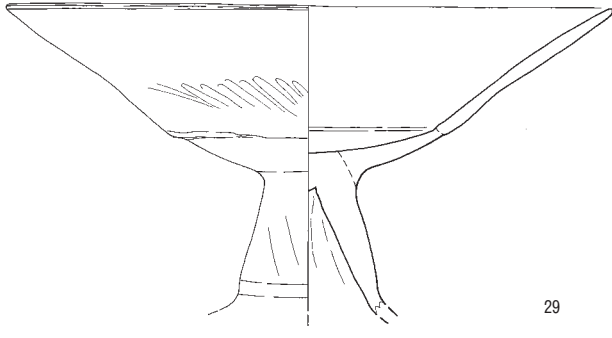
第 12 図 1 号溝出土土器実測図その② (1 / 3)



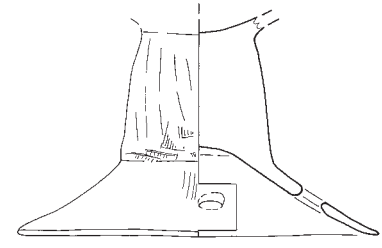
28



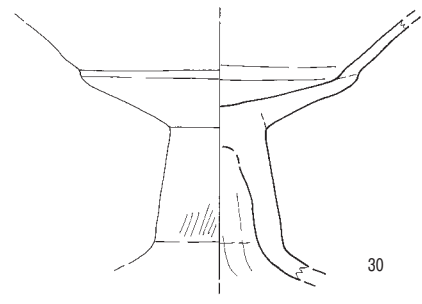
34



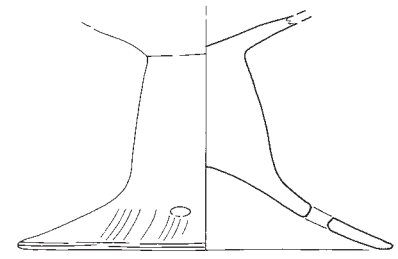
29



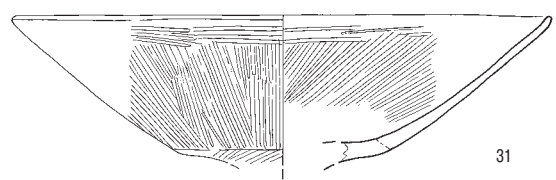
35



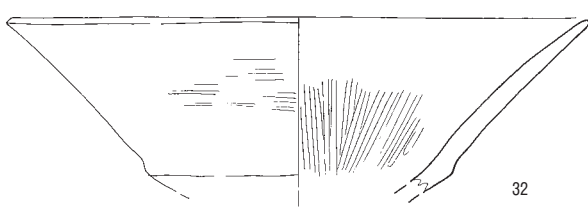
30



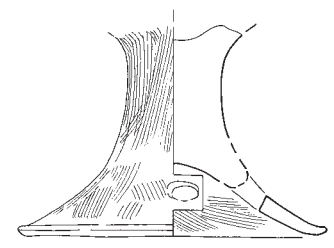
36



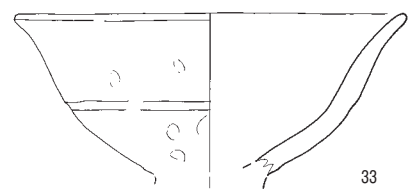
31



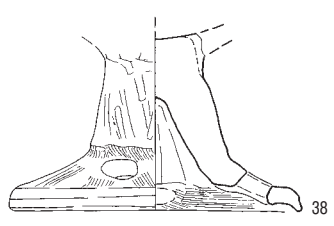
32



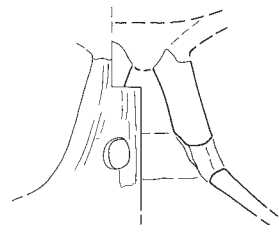
37



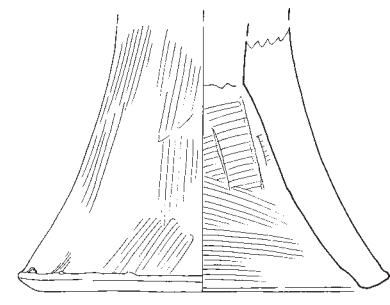
33



38

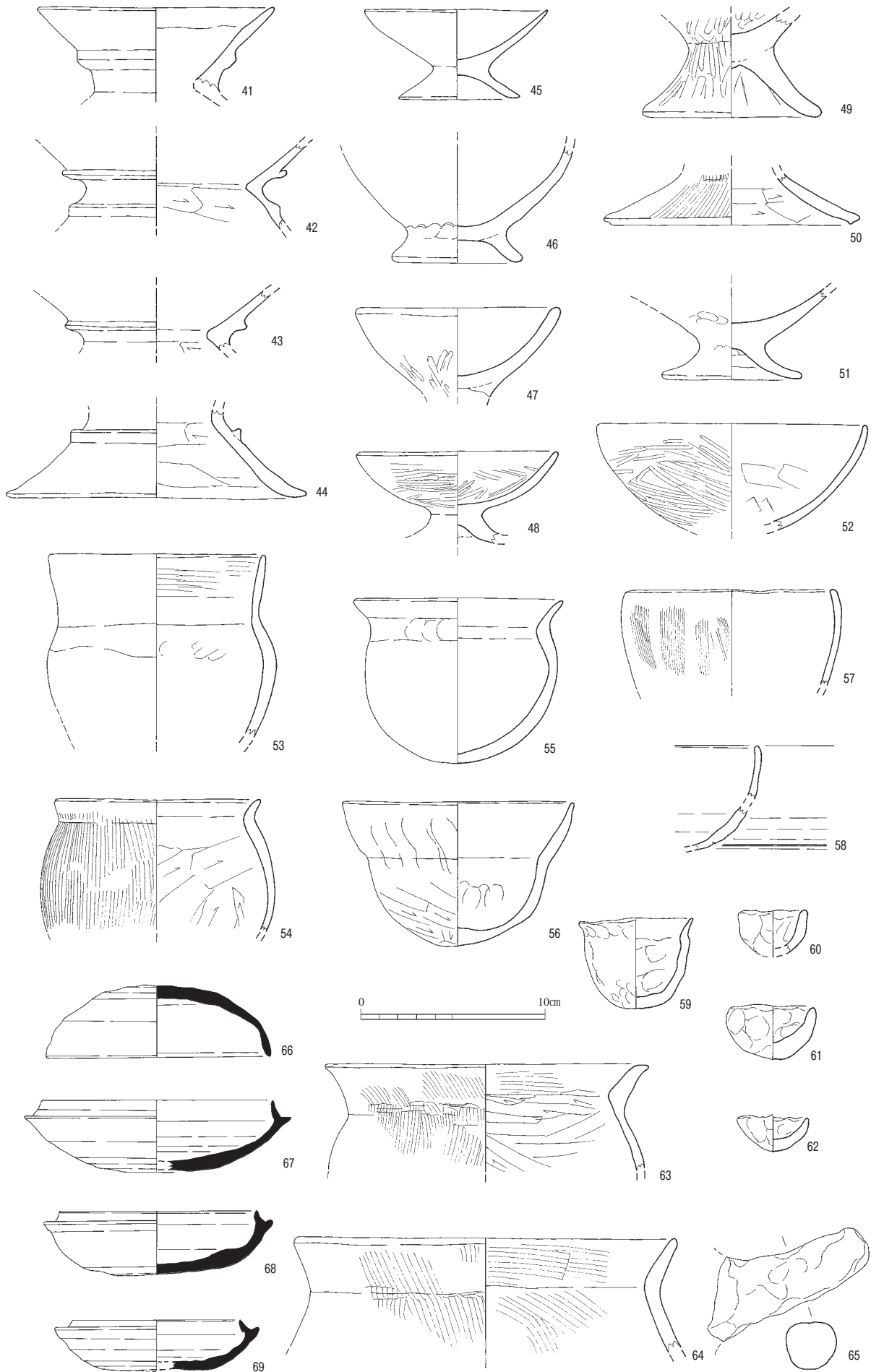


39



40

第13図 1号溝出土土器実測図その③ (1 / 3)



第 14 図 1 号溝出土土器実測図その④ (1 / 3)

後の豊前市教育委員会による東側隣接地の調査の際に、この2時期の溝が切り合いながら延びている状況が確認された。したがって、少なくとも本調査区の東側においてはこの2時期の溝が切り合っていたはずであるが、弁別できなかったことは遺憾であった。溝は幅約4mで断面は浅い台形状を呈し、ほぼ直線的に延びていて調査区内で約20mを確認した。埋土は大きく5層に分層でき、いずれもレンズ状に堆積していた。溝からは多量の土器が出土したが、その大半は下層の7層からの出土であり、特に北側に集中していたため、溝の北側にある1・2号住居跡などからなる集落からの投棄と考えていたが、上述のように古墳時代後期の溝が切り合っているということであれば、おそらく南側に主に堆積する1～6層はこの新しい溝の埋土である可能性が高い。溝の東半は南側が一段深く掘り込まれている状況が確認でき、これも新しい溝の掘削により形成されたものである可能性が高い。この結果、調査時に下層として取り上げた最下層の8層出土土器に古墳時代後期の土器が見られることになったのであろう。

#### 出土土器（第11～14図、図版9・10）

**土師器（1～65）** 1～15は古墳時代前期の甕形土器である。球形の胴部と短く外反する口縁部を持ち、口縁部調整は内・外面ともにナデ、胴部外面調整がハケ目あるいはハケ目後ナデ、胴部内面はケズリ調整で器壁を薄く仕上げ一群である。口縁部形態に特徴があり、1～5のような布留式土器の新段階に含まれるような僅かに内湾しつつ開いて端部を四角く納めあるいは上方につまみ上げるもの、6～10のような緩く外湾しながら開き端部を四角く納める移行形態のもの、11～13のように古墳時代中期の如意形口縁で端部を丸く収めるものが混在する。16・17も甕形土器の底部であろうが、尖底状を呈して器壁が分厚く、古墳時代前期に見られる在地系の長胴甕の系譜を引くと考えられるものも見られる。18～25は壺形土器である。18・19は球胴気味の胴部に緩く外湾しながらやや長く伸びる素口縁を持つ甕である。20～25はいわゆる二重口縁甕で、口縁部が直立気味に短く伸びる20・21・24・24、長く縦に伸びる22、大きく開く25などが混在する。特に24は東瀬戸内系の特徴を、25は畿内系の特徴を持つもので、注目される。26・27は鉢形土器である。口縁部が短く口縁端部を四角く納める26、口縁部がやや長く口縁端部を丸く収める27のようなバリエーションが見られる。28～37は高坏である。中でももっとも古く位置づけられるのが28で、坏部の屈曲部に段や沈線状の継ぎ目が見られず、脚部も緩やかに開き器壁が薄いなど、弥生時代後期後半～末の特徴を持つ。29はやや新しい様相を持ち、坏部が連続的に伸びるものの僅かに段が見られ、脚部も上位がはっきり太くなっていて下半に段が見られるなど布留式期の特徴を持つものである。31の坏部も坏部に段が見られずおおよそ古墳時代前期に位置づけられよう。また34～37の脚部も同じ時期の特徴を持ち、34はいわゆる低脚高坏で布留式期、35～37は脚上半が中空でない布留式の高坏である。これらはいずれも精製品で、31・32・34にはミガキ調整が施されているほか、35・36なども丁寧なナデ仕上げが施されている。38・39は脚が途中で明瞭に屈曲しておりやや新しい様相を示す。脚部にはいずれも穿孔が施されており、34は9個、35は3個、36は3個、37は4個、38は3個、39はも3個の穿孔が施されていたものと見られる。いずれも焼成前の穿孔である。40は器台である。おそらく上部も中空のものであろう。41～44は鼓形器台である。いずれも非常に丁寧な作りで、外面を丁寧なナデにより平滑に仕上げ、内面もケズリを施した後ナデで仕上げる。45～52は脚付埴である。これも精製器種で、47～49・52は外面（一部、内面にも）にミガキを施し、赤色顔料こそ見られないものの焼成時に赤色調に仕上げるものが多い。53は小形の短頸壺、54は小型甕であろうか。53は胴部内面が指ナデ仕上げであるのに対し、54は胴部内面にケズリ調整を施す。いずれも胴部最大径が12cm内外の小型品である。55・56は小形の鉢であろう。

55は胴部が深く口縁部が短いのに対し、56は胴部が浅く口縁部が長く伸び、内湾する。ともに胴部径が10～12cmほどである。57・58は壙形土器であろう。いずれも胴部がかなり深く、素口縁である。59～62は手捏ね土器である。指頭圧痕が明瞭に残りゆがみもある。59は口縁部が短く外反し、その他は素口縁である。63・64は古墳時代後期の甕形土器であろう。いずれも長胴と短く外反する口縁部を持つ。63は胴部内面を削ることにより頸部内面の稜が際立つ典型的な長胴甕の例である。65は甌の把手であろう。かなり細長く直線的に伸びるものである。

須恵器（66～69） 66は坏蓋である。天井部の平坦な部分に回転ケズリ痕跡が見られる。口径は12.3cm、器高は3.95cmをはかる。67～69はカエリを持つ坏身である。67はカエリ部がやや長く、68・69は短い。口径は67がやや大きく12.7cm、68が10.8cm、69が9.2cmをはかる。これらの須恵器はいずれも古墳時代後期のものである。

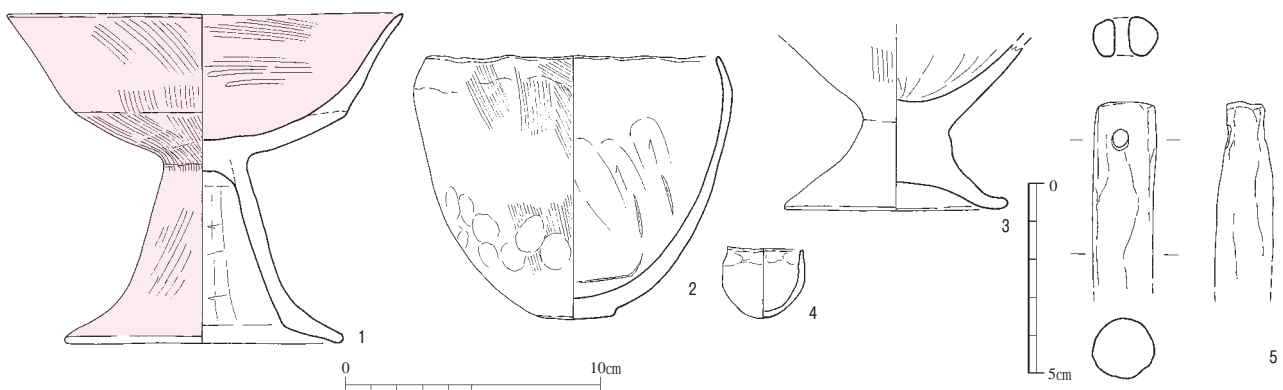
### (5) その他の出土遺物

#### 包含層等出土遺物（第15図）

土師器（1～4） 1は古墳時代前期の高坏である。坏部は胴部屈曲が明瞭で口縁部は直線的に開いて端部付近がわずかに外反し、脚部も直線的に開いて端部付近で明瞭に屈曲して開く器形を持つ。坏部中位の屈曲部には外面に明瞭な段が見られ、粘土帯の接合痕跡が破断面に明瞭に観察される。器壁調整は坏部内面・脚部外面にミガキが認められ、おそらく丹塗り磨研調整であろう。ただし坏部外面はハケ目調整であり精製器種ではあるが調整には徹底さが見られない。2は壙形土器で、やや底部がすぼまる球状の器形を持ち、底部はわずかにレンズ状底の様相を呈する。器壁調整は外面が指オサエ成形痕の上からハケ目仕上げ、内面は指ナデによる仕上げ痕跡が明瞭に残り、手捏ね感のある仕上がりとなっている。3は脚付壙である。脚部と坏部下半が残る。脚部は短く、広く開きつつ端部が湾曲して地よりわずかに浮く。脚上部は短い中空でなく粘土がよく充填されて坏底部の器壁がきわめて厚い作りである。調整は摩滅しておりはっきりとわからないが坏部・脚部外面に部分的にハケ目調整痕跡が残る。内面は脚部がナデ仕上げ、坏底部には工具を用いたナデ調整痕跡がわずかに認められる。4は手捏ねの小形壙である。直径3cm、器高2.8cmときわめて小型な一品で、内・外面に指頭圧痕がよく残る。口縁部がわずかに外反し、器壁が薄いことから、甕を模したもののか。

#### その他の遺物（第15図、図版10）

土製品（5） 5は土錘である。体部は断面正円形の棒状で、上下端部を平たくつぶして穿孔を施すタイプのもので、この地域の古墳時代遺跡からしばしば出土するものである。直径約1.6cm、一方の端部が欠損して残っていないが推定長約6～7cm程度であろう。



第15図 包含層等出土土器（1～4）、溝1出土土製品（5）実測図（5は1/2、他は1/3）

## (6) 小結

以上、久路土芝掛遺跡第2次調査の成果について述べてきた。以下、簡単にまとめを行っておきたい。

今回の調査においては、弥生時代・古墳時代の遺構群が、数は少ないものの発見された。付近におけるこれまでの発掘調査では、住居跡や貯蔵穴などの集落を構成する遺構群が見つかったことはほとんどなく、貴重な成果といえよう。

まず、弥生時代の遺構であるが、土坑が1基確認された(1号土坑)。土坑内部からの出土遺物が全くなく、この遺構の所属時期を推定するにはやや困難が伴うものの、断面形態が(壁の崩落によりやや不明瞭となつてはいるものの)三角フラスコ状を呈していたであろうことは、土層の堆積状況から見てほぼ間違いないといえ、この遺構が弥生時代前～中期の貯蔵施設として一般的な、いわゆる袋状貯蔵穴であることは疑いないといえよう。

残念ながら、本地点においては弥生時代に属する遺物が出土しておらず、調査時点ではこの遺構の時期をこれ以上推測する手がかりがなかった。しかし、平成23年度に東西隣接地が豊前市教育委員会によって調査され、東側隣接地における調査区から弥生時代前～中・後期の竪穴住居跡などの遺構が出土し、この付近が弥生時代前～中・後期のそれぞれの時期に集落として活用されていたことが判明した。

この成果から見て、本地点で出土した1号土坑が、弥生時代前～中期に属する遺構であると考えて差し支えないと思う。

次に、古墳時代の遺構である。竪穴住居跡が2棟と、東西方向に調査区を横断する大溝が1条確認された。大溝中の出土土器は古墳時代前期末～中期前葉と後期の2時期に分かれるが、先に触れたようにこの溝は古墳時代前～中期と後期の2条の溝を1条の溝であると誤認して掘ってしまったためにこのような出土土器の時期幅が認められるものであり、古墳時代前期末～中期前葉と後期の2つの溝が重複していたものと考えられる。一方竪穴住居跡の所属時期であるが、1号・2号ともに古墳時代中期前葉頃の土器が出土しており、この時期の所産であることは間違いない。したがって、1号溝のうち古い時期のものと両住居跡がおおよそ同じ時期にあるといえる。

ただし、出土土器の時期幅には若干の相違があり、溝は古墳時代前期末頃から中期前葉までの土器を出土するのに対し、住居跡からは中期前葉の土器のみが出土している点は注意される。おそらく、溝が掘削されたのが古墳時代前期末をそうさかのぼらない時期であり、その後両住居跡の営まれた時期を通じて埋没していったものとみられる。この溝の埋没については、同一層から古墳時代前期末～中期前葉の土器群が集中し、入り乱れて出土した状況から、中期前葉に求めることができ、前期末に属する土器もこの時期に同時に投棄されたものとみられる。すなわち、溝への土器の投棄(≒溝の埋没)がこの時期に起きたのであって、おそらく集落自体はそれ以前の遅くとも古墳時代前期末から営まれていたもので、溝の掘削もおそらくその時期とみることができよう。

なお、調査区のほぼ全域から検出されたピット群からは目立った出土遺物がなく、時期の特定ができるものはなかった。おそらく古墳時代集落の営まれた時期のものが大半を占めるのであろう。

# 圖 版





1 久路土芝掛遺跡第2次調査区(上が北)



1 調査区遠景（南から）



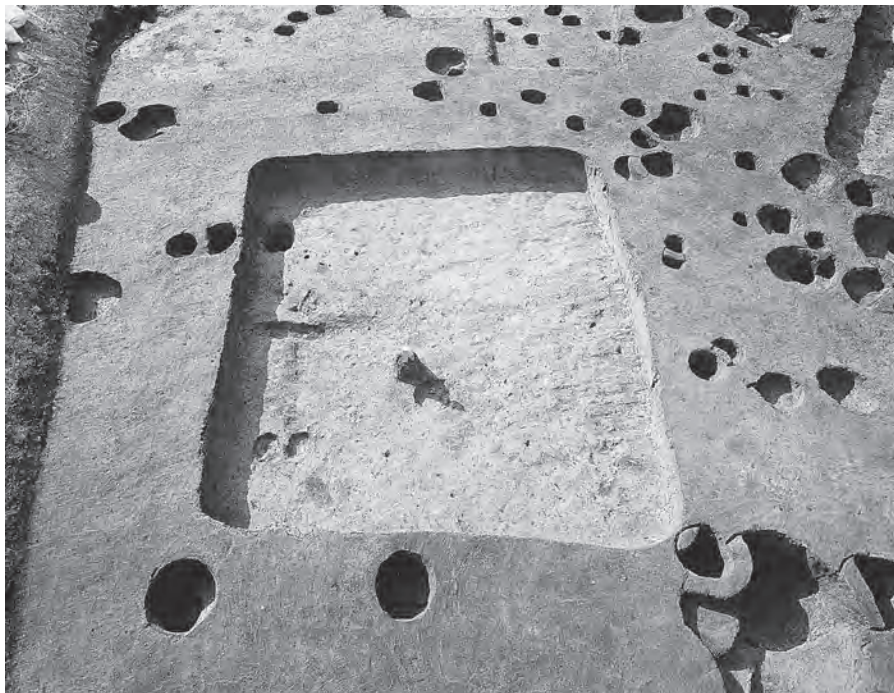
2 調査区近景（北東から）

1 調査区北半部（上が北）



2 調査区北半部（南西から）





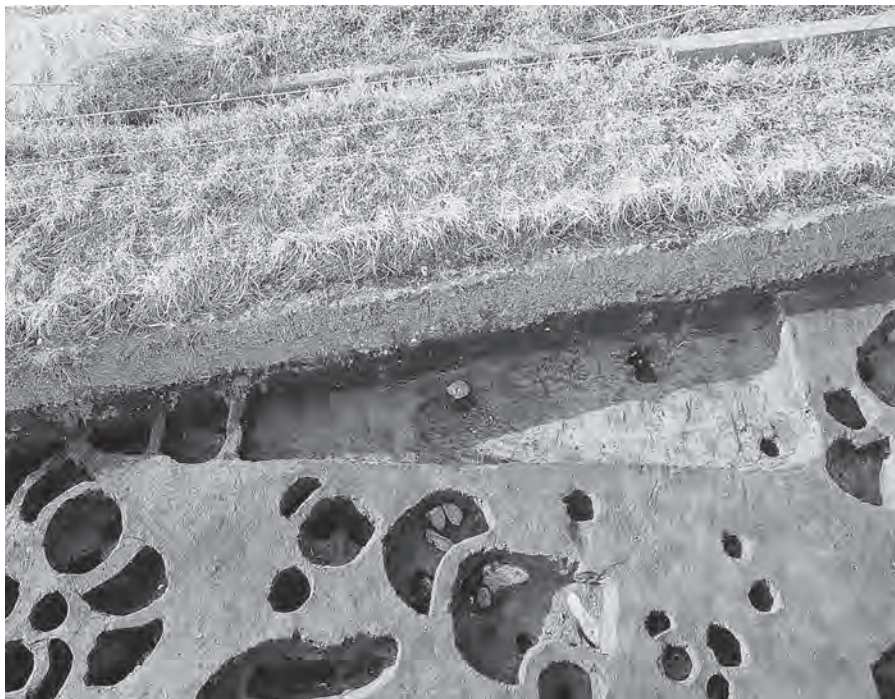
1 1号住居跡完掘状況（北から）



2 1号住居跡土層（北東から）



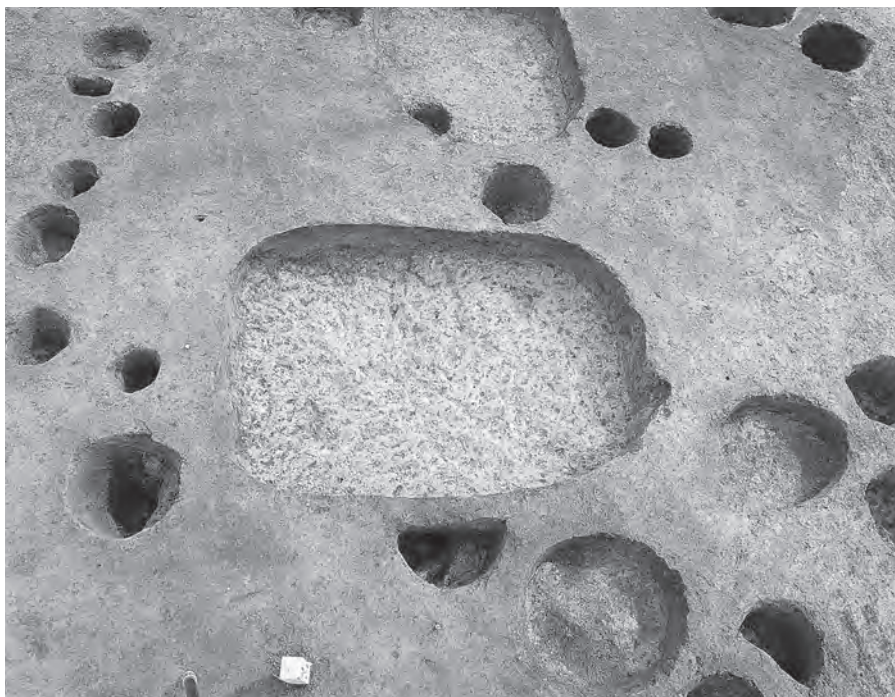
3 1号住居跡埋没時に掘削されたピット内からの遺物出土状況（北西から）



1 2号住居跡完掘状況（東から）



2 1号土坑完掘状況（西から）



3 2号土坑完掘状況（北から）



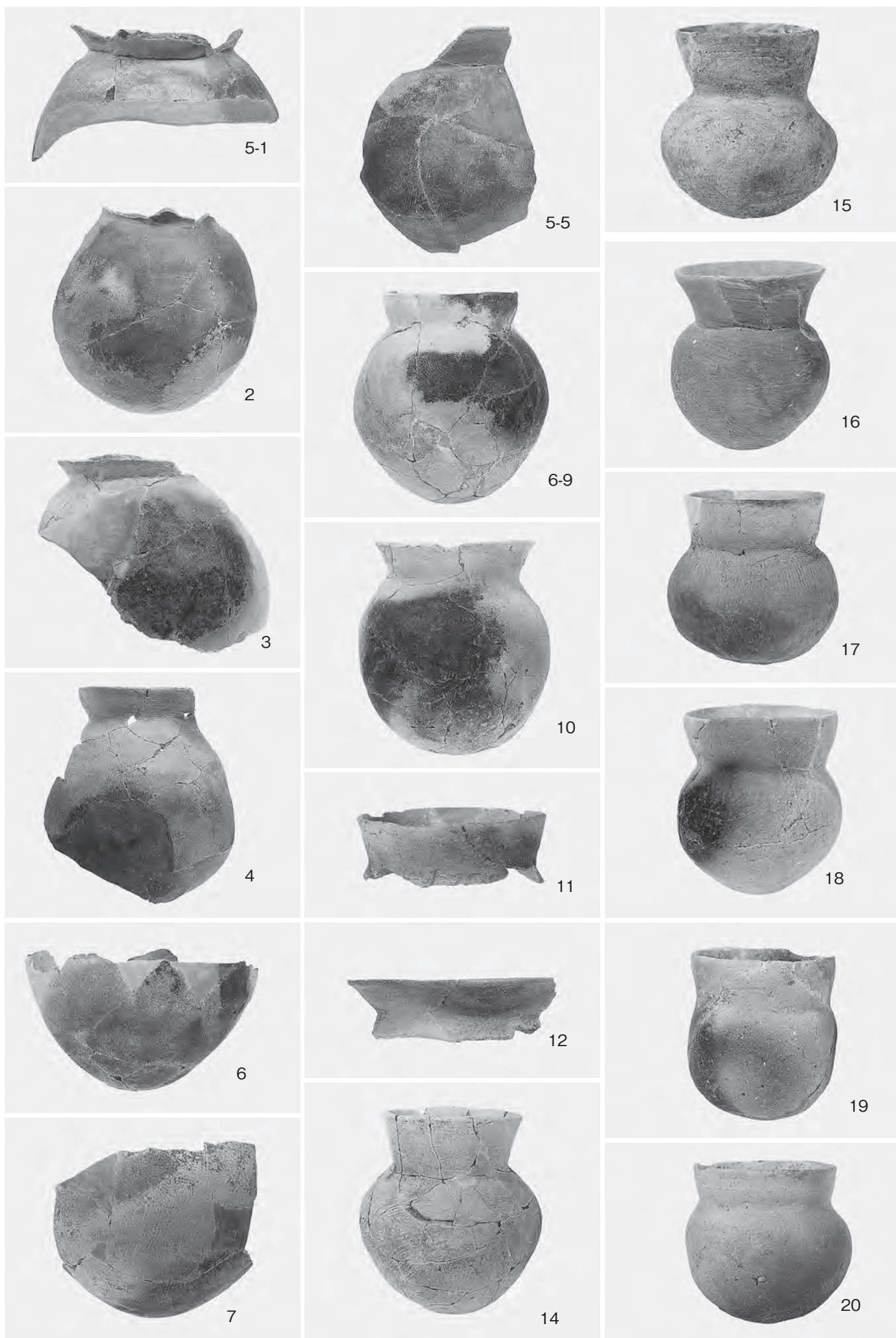
1 1号溝内土器出土状況  
(南東から)



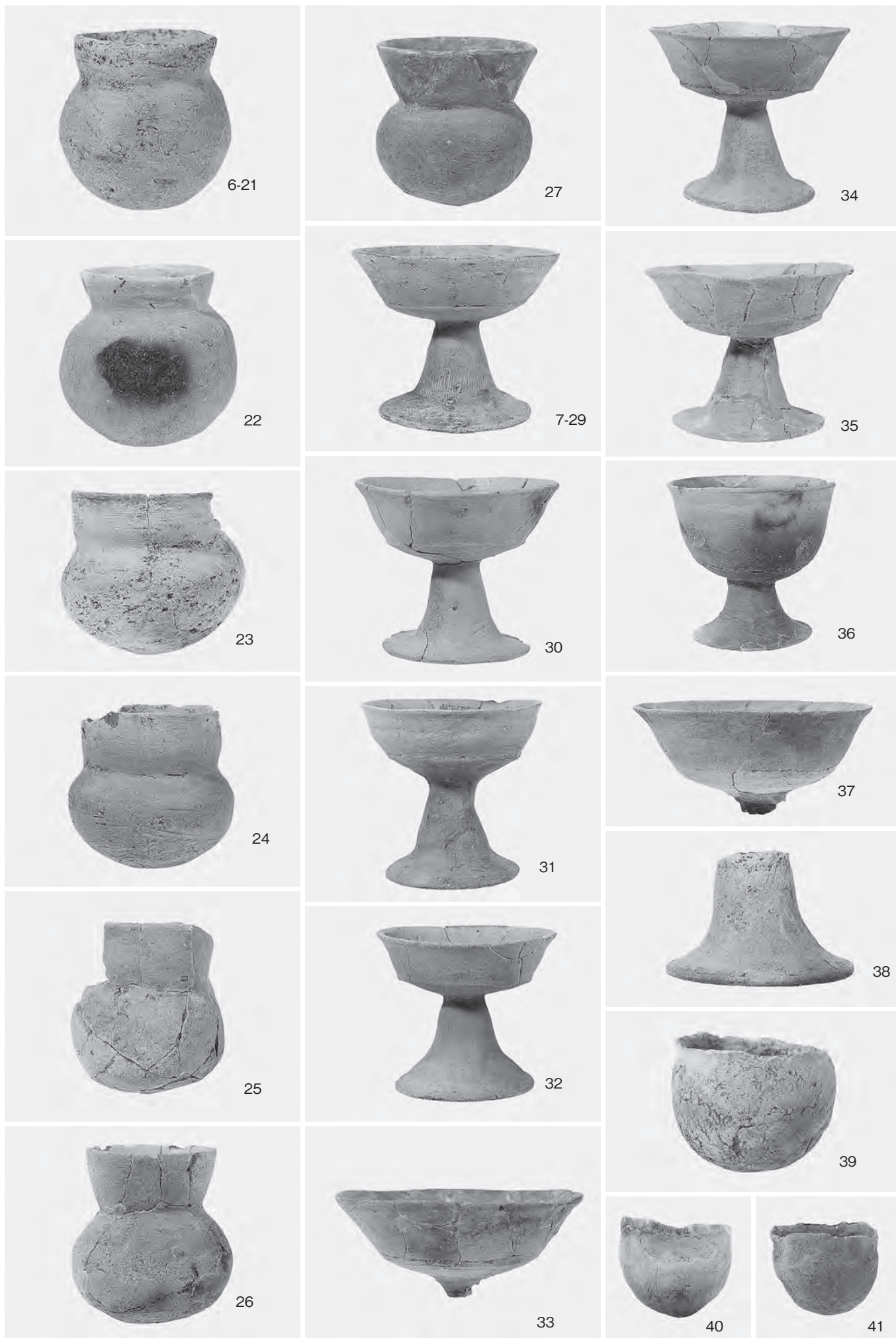
2 同上 (北東から)



3 1号溝土層 (南西から)

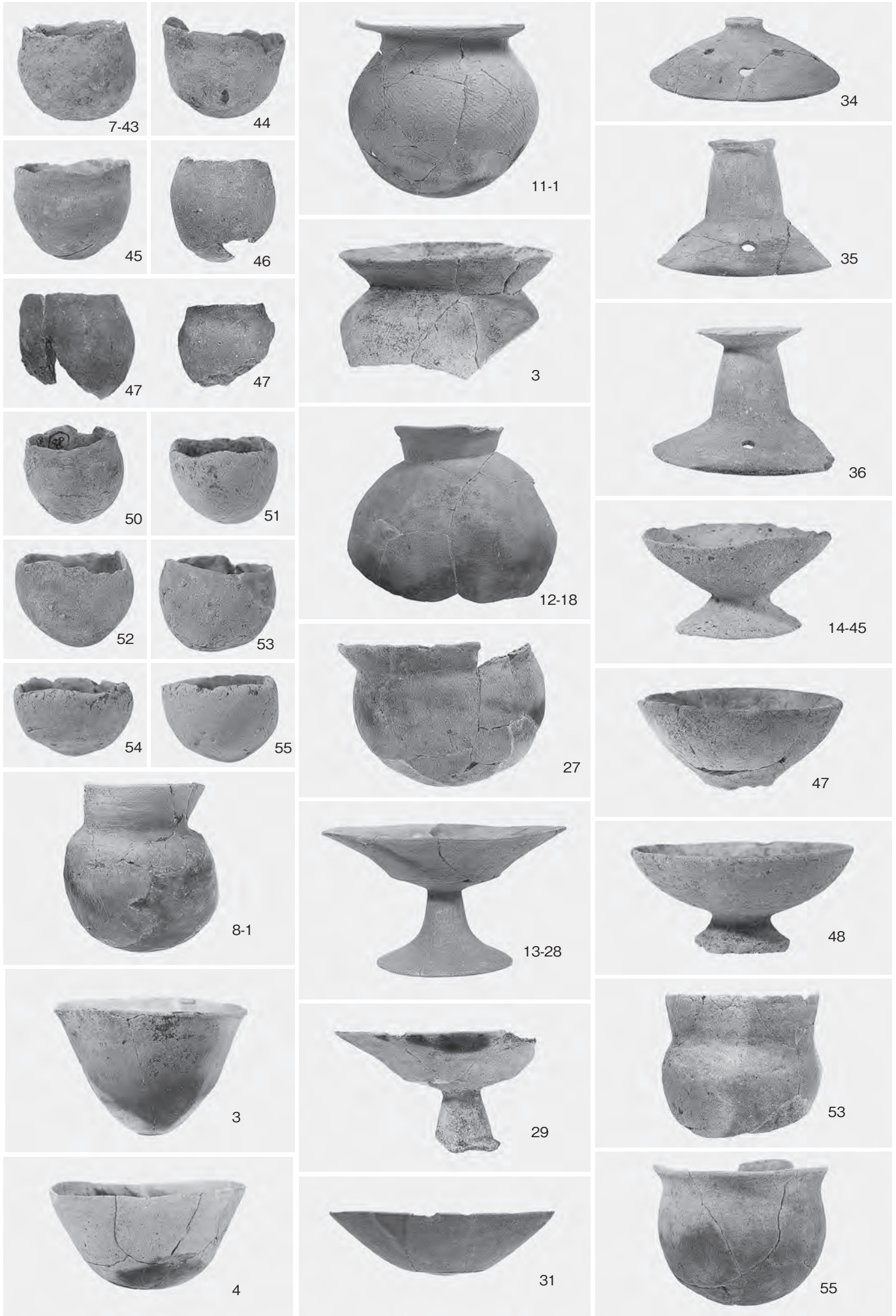


1号住居跡出土土器（その①）

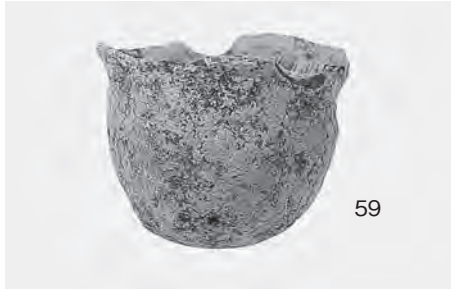
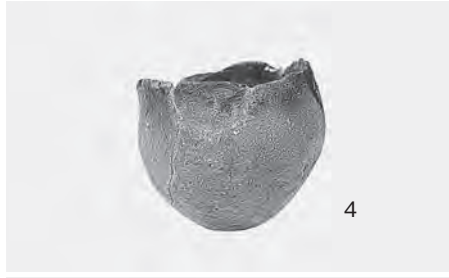


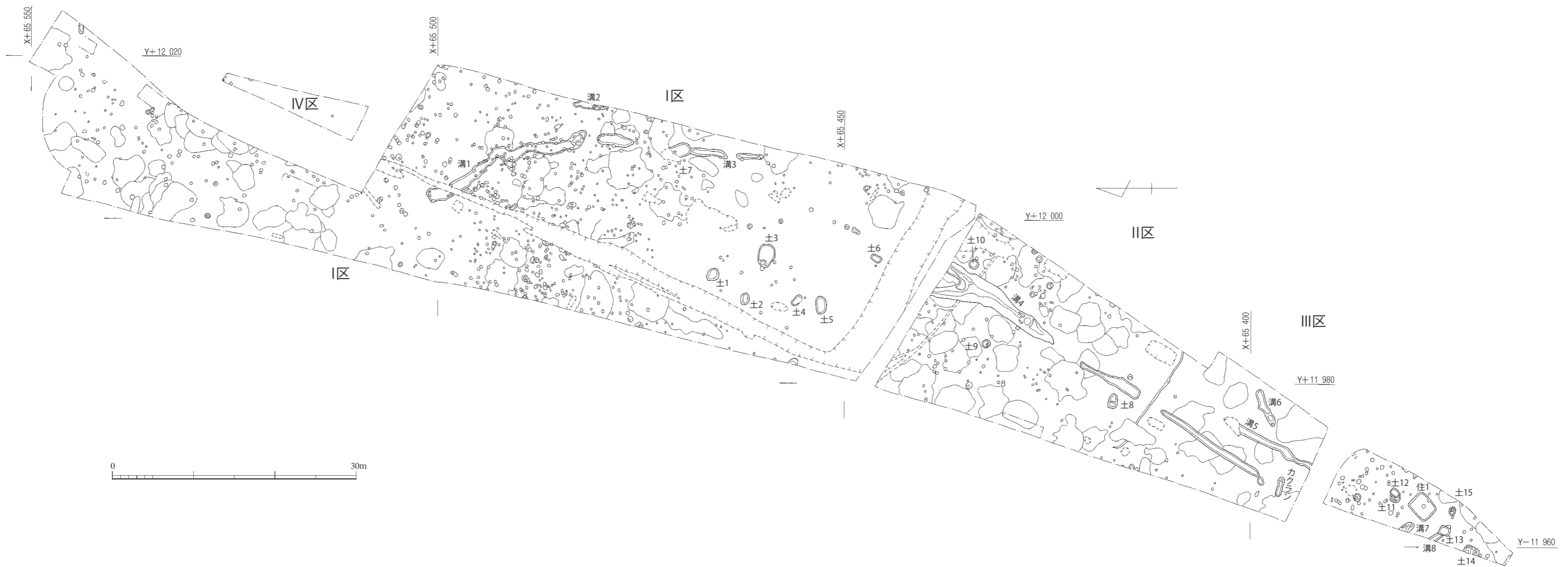
1号住居跡出土土器（その②）



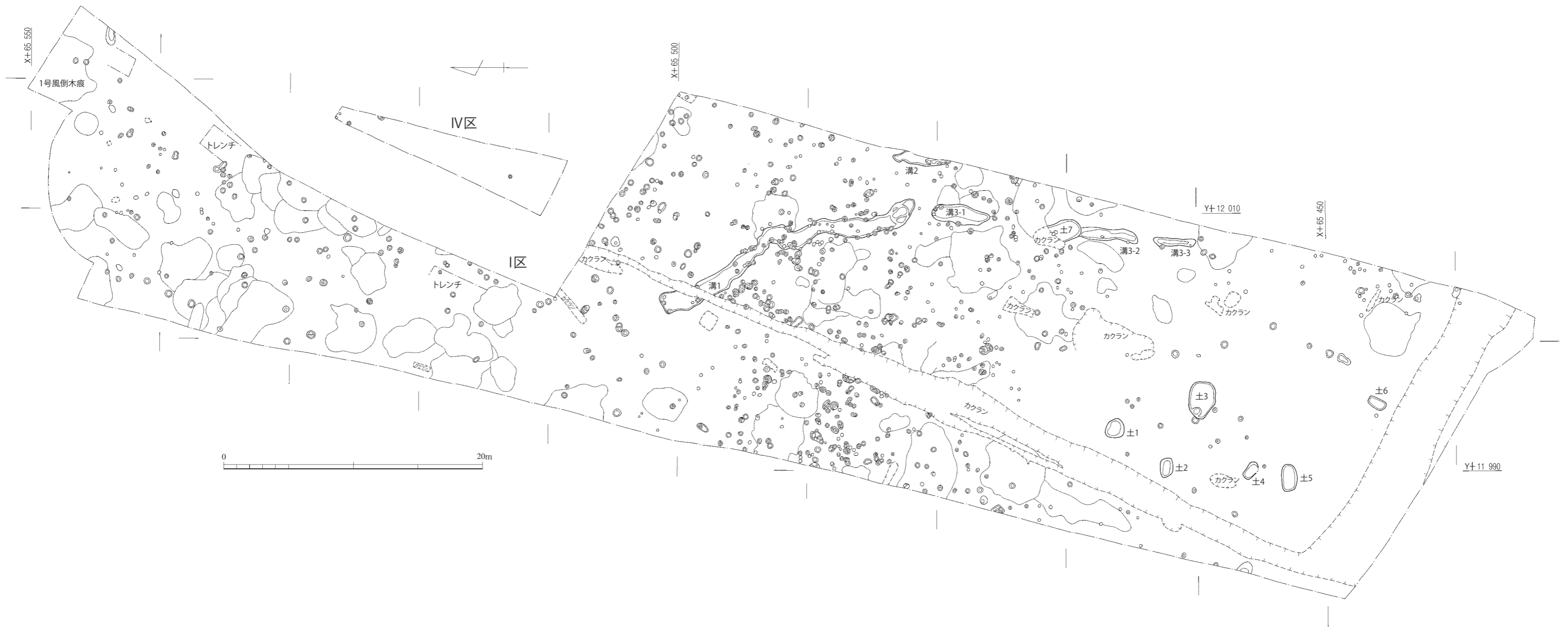


1号住居跡出土土器(その③)、2号住居跡出土土器、1号溝出土土器(その①)





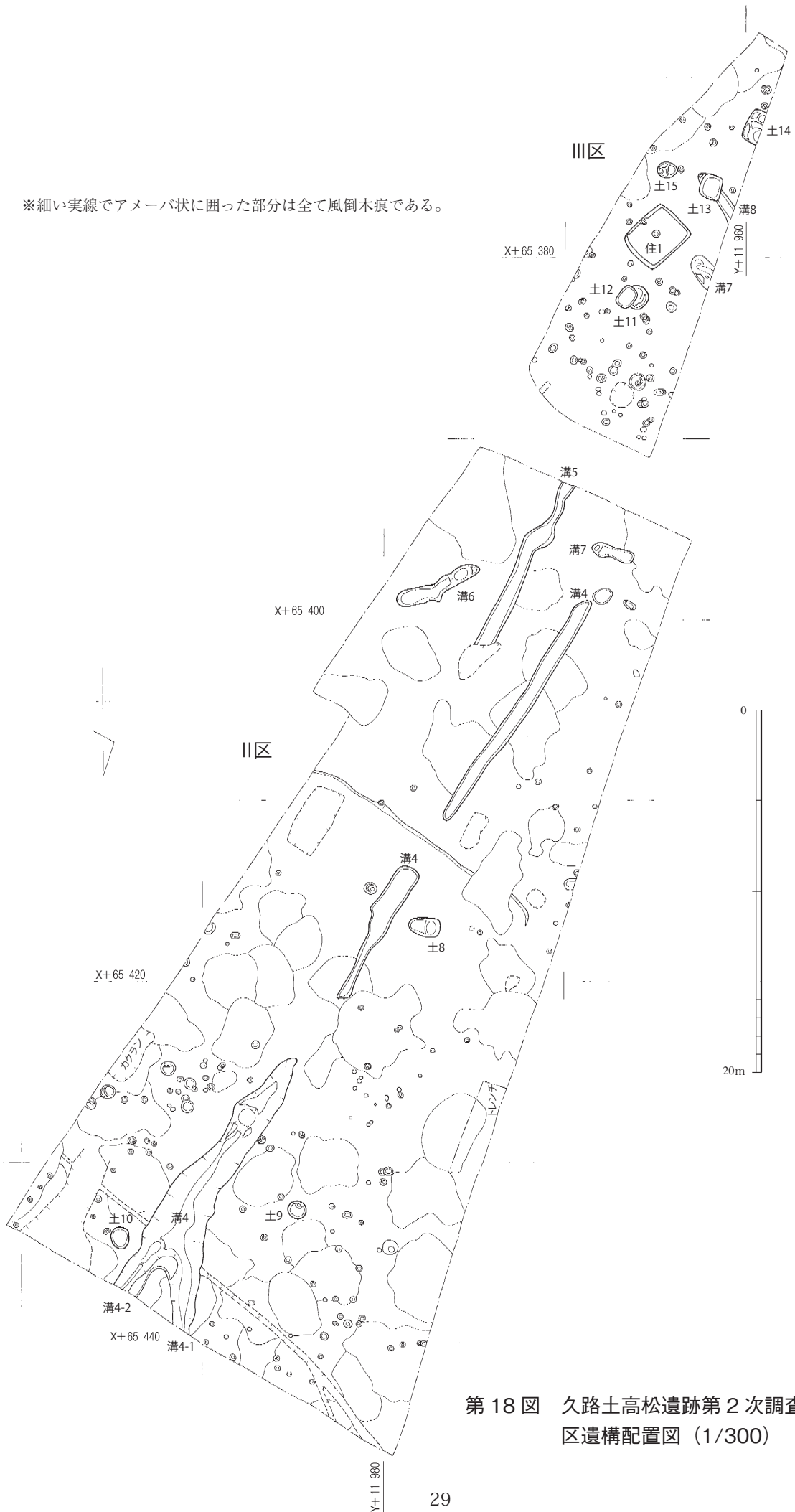
第 16 図 久路土高松遺跡第 2 次調査全体図 (1/500)



※細い実線でアメーバ状に囲った部分は全て風倒木痕である。

第 17 図 久路土高松遺跡第 2 次調査 I・IV区遺構配置図 (1/300)

※細い実線でアメーバ状に囲った部分は全て風倒木痕である。



第 18 図 久路土高松遺跡第 2 次調査 II・III 区遺構配置図 (1/300)

## 2 久路土高松遺跡第2次調査の報告

### (1) 調査の概要

**調査区の概要** 調査区は、既述のように南北に約180m、東西に約25mと、南北に細長い形態を示す。調査区は旧地割の境界部にある石垣や溝などによっていくつかに分割されており、発掘調査においてはこの地割りのうち調査に障害となるような大規模なものを境として調査区を4つに分割した。最も北側にⅠ区、その東側の北に偏ってⅣ区、Ⅰ区の南側にⅡ区、その南側にⅢ区が位置する。

調査区全体は一連の尾根状高まりの上に位置しており連続した地形であるが、この高まりの内部で最も北側が低く、南側に行くにつれて高くなっていく傾向にあった。調査区の北側には県道野地塔田線が東西に走っており、そのすぐ北側隣接地における本県道バイパス工事に先立つ試掘調査では深い落ち状地形となっていることが明らかとなっている。調査区最北端部には落ち状地形の端部が確認され、北側における遺跡の広がりほぼ調査区の端部に一致すると考えてよからう。また、調査区の西側は遺構面が中央に比べて数十cm低くなっていた。調査区の西側隣接地の一部は過去の圃場整備時に豊前市教育委員会によって発掘調査が行われており（久路土高松遺跡第1次調査）、遺構分布密度は非常にまばらで西側が低くなって落ちに続く状況が明らかになっている。また調査区の東側も平成24年度に行われた本県道バイパス付帯工事（用水路建設）に先立つ試掘調査で深い落ち状地形となっていることが明らかとなった。以上により、久路土高松遺跡ののる微高地の北・西・東側端部が把握できたことになり、今回の調査によって久路土高松遺跡は南側を除く大部分が発掘調査されたことになる。

**調査区の基本土層** 調査区の表土は耕作土と水田床土（人為的に張られた灰褐色粘質土）からなる。その下に広がる地山は、まず火山灰土の風化したいわゆる黒ボク土があり、その下に黄～（暗）茶褐色の粘砂質土と灰黄色砂礫土がある。前者が上層、後者が下層に位置していて層間は漸移的であった（図版14-1を参照）。調査区は全域にわたって大きく削平されており、遺構は基本的にこの茶褐色粘砂質土あるいは灰黄色砂礫土に切り込まれる形で検出された。調査区ごとに旧標高の低い方（北側・西側）がよく残り、高い方が削平が激しく下層の砂礫土が露出する傾向にある。このことから、旧地形はおおよそ南から北、西から東に向かって緩やかに下っており、それをおおよそ調査区ごとに平坦に削平して耕作地を造成した結果、現況に至ったものであることが分かる。

**遺構の検出状況** 調査区の全域にわたって、この地山を切り込む形で風倒木痕と思われる地山の攪乱痕跡が数多く認められた。他の遺構との切り合い関係は全て風倒木痕が古い関係にある。全ての風倒木痕について、検出面から一段下げて遺物の出土の有無を確認したが、1号風倒木痕以外からは遺物の出土が見られなかったため、それ以上の掘り下げを行わず、原則として風倒木痕は地山として扱った。

遺構は、地山あるいは風倒木痕を切り込む形で掘削されていた。黄～（暗）茶褐色粘砂質土の地山部分には比較的多くの遺構が残っていた一方で、特にⅡ区南半のように著しく削平されて下層の砂礫土が露出していた部分では遺構は少なかった。また、上層からの攪乱も多く、特にⅡ区南側では鍵状に曲がる大規模な溝が調査区南端から西側にかけて掘られていたが、近隣に住む作業員によると昭和30年代以降まで用水路として機能していたものということであった。

検出された主な遺構としては、竪穴住居跡1棟、土坑15基、溝8条などがあり、このほか多数のピットを調査している。出土遺物は極めて少なく、パンケースに5箱程度であった。北側のⅠ・Ⅳ区と南側のⅡ・Ⅲ区でやや時期が異なる傾向があり、北側に比較的新しい遺物が多く、南側には弥生時

代の遺物が多い。なお縄文土器は調査区の全域から散発的に出土する。以下、個別の遺構について述べていく。

## (2) 竪穴住居跡

### 1号竪穴住居跡（第19図、図版14）

Ⅲ区中央で検出した方形プランの竪穴住居跡である。規模は長辺2.8m×短辺2.4mをはかる。遺存状態は悪く、深さは極めて浅かった。主柱穴は検出できなかった。床面は混じり気のない硬く締まった黄褐色粘砂質土であり、埋土がやや砂質分の多い黒色粘砂質土を主体とすることから、両者ははっきりと区別できる。このことから、柱穴はもともとなかった可能性が高く、遺構の性格にやや疑問が生じるころではある。しかし、中央に素掘りの炉跡をもち、壁溝がほぼ全周するなどのことを総合的に判断し、本遺構を竪穴住居跡として報告する。

壁溝は南東壁の中央部で一部途切れている部分があるが、その箇所には小ピットがあり、内部から縄文土器の大片（第21図1、図版20）が出土した。このピットは住居跡の壁にぴったり沿っており、壁溝との関係も整合性があったため、現場では住居跡に伴うものと判断した。この理解に沿えば、本住居跡は縄文時代後期に属する可能性がある。一方、このほか住居内からは弥生時代末～古墳時代初頭の土器片も出土しており、この時期に属する遺構である可能性もあり確定できない。

### 出土土器（第21図、図版20）

**縄文土器**（1）1は縄文土器の浅鉢である。底部が破損して全体の様子は不明である。内・外面を細いヘラ状工具で丁寧にミガキ、外面を黒色に焼成する、いわゆる黒色磨研土器の一種で、後期後半～晩期に属するものと考えたい。口径は約21cmをはかる。1号住居跡内ピット出土。

**弥生土器**（2）2は調整から見ておそらく壺と考えられる弥生土器の大型胴部片である。断面台形の貼付突帯に×印の連続刻目を施す突帯は後期後葉～末に多く見られる。なお図の天地は不明。

## (3) 土坑

### 1号土坑（第19図、図版15）

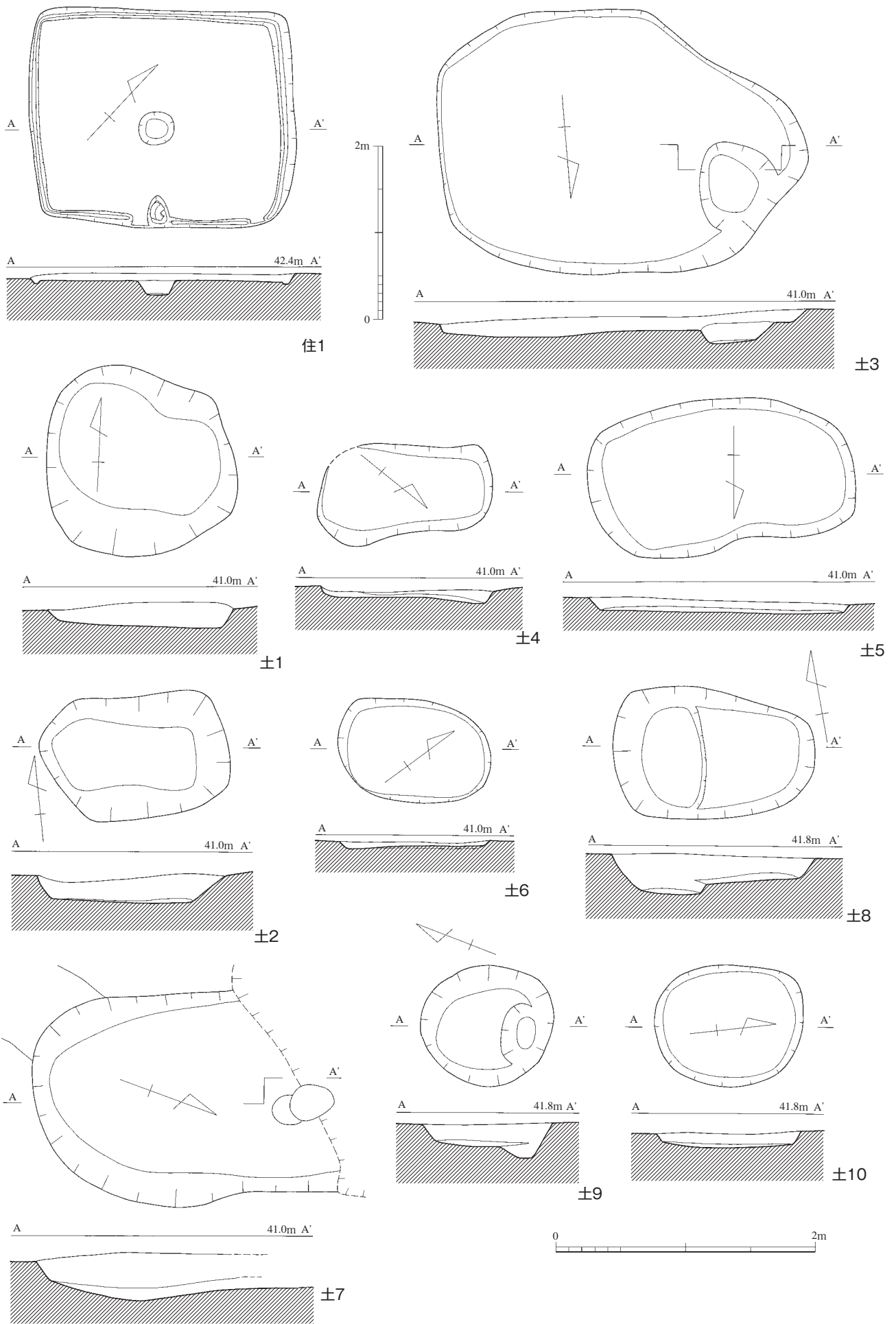
I区中央やや南で検出した不整形の土坑である。規模は東西軸・南北軸ともに約1.5mほどをはかり、底部は平たい。残存状況は非常に悪く、壁の高さはずっとも高いところでも20cm以下である。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。遺物は出土していない。

### 2号土坑（第19図、図版15）

I区南半やや西寄りで検出した不整形の土坑である。規模は東西方向にやや長い長軸1.5m、短軸は0.9mをはかる。底部はわずかに中央部が窪む船底状で、壁の立ち上がりは高さ20cm強と大きく削平された状態である。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。遺物は出土していない。

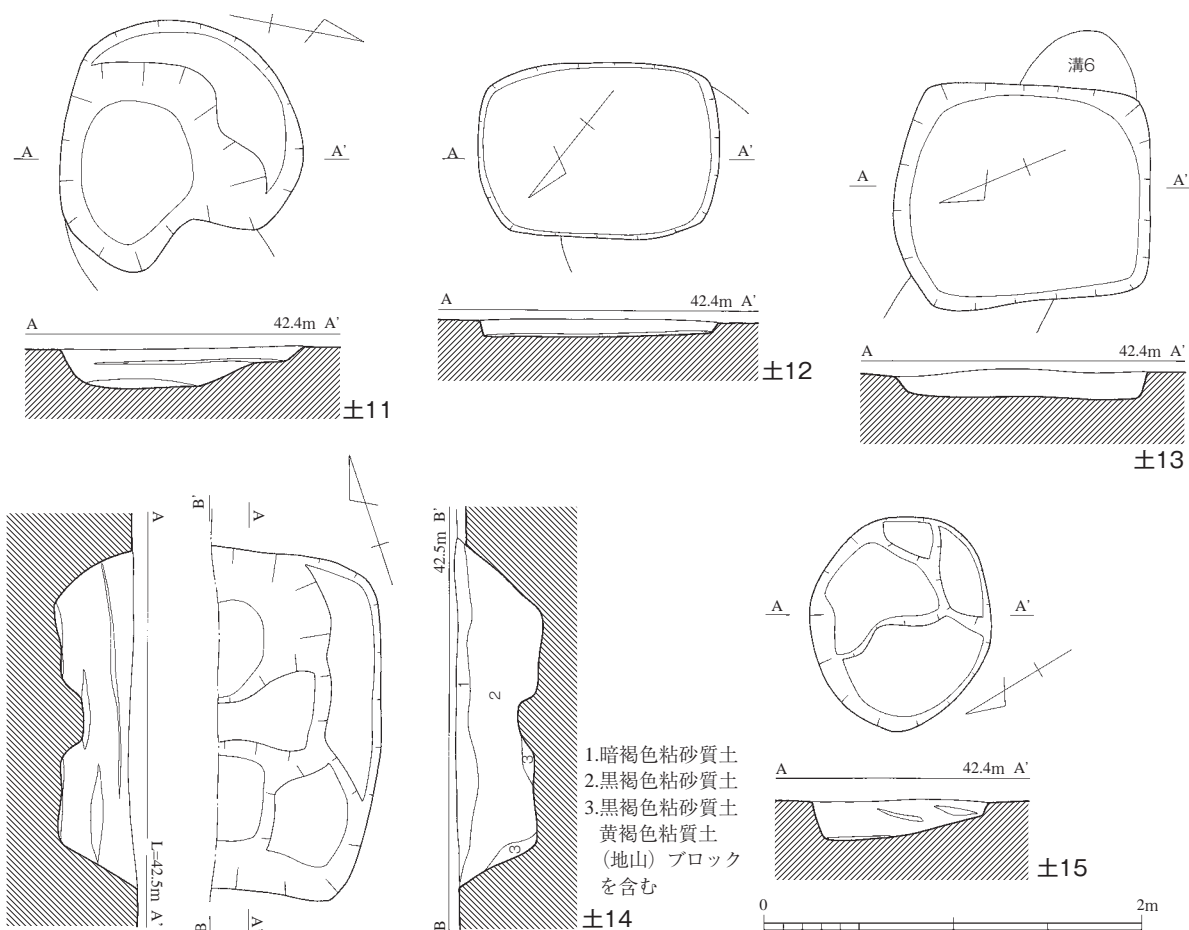
### 3号土坑（第19図、図版15）

I区南半で検出した不整形の大型土坑である。規模は東西方向がやや長く2.9m、南北は2.0mほどをはかる。床面は平坦で、北西隅が一部深く掘り込まれる。やはり削平されていて残存状況は極めて悪く、深さ80cm程度が残されるのみである。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。遺物は出土していない。



第 19 図 1 号竪穴住居跡、1 ~ 10 号土坑実測図 (1 号住居跡は 1/60、他は 1/40)





第20図 11～15号土坑実測図 (1/40)

#### 4号土坑 (第19図、図版16)

I区南西隅で検出した不整形の小型土坑である。規模は長軸1.4m、短軸0.8mほどをはかり、床面は平坦で、深さは極めて浅い。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。遺物は出土していない。

#### 5号土坑 (第19図、図版16)

I区南西隅で検出した不整長楕円形の土坑である。東西方向が長軸で約2.1mをはかり、短軸(南北軸)は0.6mほどをはかる。床面は平坦で、深さは10cm強と極めて浅い。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。遺物は出土していない。

#### 6号土坑 (第19図、図版16)

I区南半の東寄りで検出した不整長楕円形の小型土坑である。長軸が約1.2m、短軸は0.8mほどである。床面は平坦である。残存状況は極めて悪く深さは10cm以下しか残っていない。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。遺物は出土していない。

#### 7号土坑 (第19図)

I区南半の東寄りで検出した不整長楕円形の土坑である。北側が攪乱により破壊されていて本来の大きさは不明であるが、長軸2.4m以上、短軸は約1.6mほどをはかり、I区で検出された土坑の中では大型の部類にはいる。底部は船底状で、壁は大きく削平されているものの最大40cmほどが

残っていた。埋土は上層が暗褐色粘砂質土、下層にごく薄く暗灰褐色砂質土が堆積していた。遺物は出土していない。

#### 8号土坑（第19図、図版17）

Ⅱ区中央で検出した、平面形が隅丸台形を呈する土坑である。東西方向に長軸をとり、約1.5mをはかる。その途中から西側が一段深く掘り込まれている。短軸は南北方向で約1.0mをはかる。深さは深い部分が約30cm、浅い部分が約20cmほどをはかる。埋土は上層が黒褐色粘砂質土、下層が暗褐色粘砂質土で、レンズ状堆積の様相を示す。遺物は出土していない。

#### 9号土坑（第19図、図版17）

Ⅱ区北側で検出した、ほぼ円形の小土坑である。規模は直径が約1mをはかる。深さは浅い部分が20cm、南側が一段深く掘り込まれており約30cmほどである。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。遺物は出土していない。

#### 10号土坑（第19図、図版17）

Ⅱ区北東隅で検出した、円形に近い略楕円形の小土坑である。規模は直径約1～1.2m、深さは極めて浅く15cm弱をはかる。埋土は黒褐色粘砂質土の単層で分層できない。遺物は出土していない。

#### 11号土坑（第20図、図版18）

Ⅲ区北側で検出した不整形の土坑である。12号土坑に切られており、東側が本来の形状を呈していない。おそらく不整形円形を呈すると思われる。規模は南北約1.3m、東西約1.3m+ $a$ で、深さは浅いところで約10cm、南東側が一段深く掘り込まれており約30cm弱をはかる。埋土は上層が暗褐色粘砂質土、下層が暗黄褐色粘砂質土で、ともにレンズ状堆積の様相を示す。遺物は出土していない。

#### 12号土坑（第20図、図版18）

Ⅲ区北側で11号土坑を切る形で検出した、隅丸長方形を呈する土坑である。規模は長軸約1.3m、短軸0.9mをはかり、深さは約10cm弱で、底は平たい。埋土は黒褐色粘砂質土の単層で分層できない。遺物は出土していない。

#### 13号土坑（第20図、図版18）

Ⅲ区西側で検出した隅丸方形の土坑である。大きさは南北軸がやや長く1.3m、東西方向がやや短く1.1mほどをはかる。深さは約15cmと浅く、底はほぼ平坦である。6号溝を切る。埋土は黒褐色粘砂質土で、底部直上に黄褐色粘砂質土の地山ブロックが点在する。遺物は出土していない。

#### 14号土坑（第20図、図版19）

Ⅲ区南側で検出した。調査区西端に位置し、一部が調査区外に広がる。南北方向のみ規模が判明し、約1.8mをはかる。底部には凹凸が多く見られ、深さは一番深いところで約50cm、浅いところでも約30cmと、ほかの遺構とくらべて比較的深い。埋土は大きく3層に分けられ、その大半を表土と同じ黒褐色粘砂質土が占める。遺物は出土していない。

## 15号土坑（第20図、図版19）

Ⅲ区南側で検出した平面略円形の土坑である。東西方向が少し長く、長軸1.1m、短軸は南北方向にとって約0.95mをはかる。床面には凹凸が見られ、もっとも深いところで約20cmほどの深さをもつ。埋土は単層で黒褐色粘砂質土である。遺物は出土していない。

## （4）溝

### 1号溝・3号溝（第17図、図版11）

I区中央部の東側を北西－南東方向にむかってやや湾曲しながら延びる。溝は断続的に延びており、調査の段階では北側の連続的に延びる部分を1号溝、南側で途切れ途切れに確認された部分を3号溝としていたが、3号溝が1号溝の延長線上に位置すること、埋土がよく似ていることから、一連の遺構として報告する。遺構は極めて浅く、おそらくかなり削平されて底部付近しか残されていないものと見られ、溝の両端部壁の立ち上がりも緩やかであることから、本来はさらに延びていたものと見られる。残存総延長は40mを越え、本来はさらに長かったものであろう。埋土は暗～茶褐色粘砂質土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。出土土器はなく、時期を判断する材料はない。

### 2号溝（第17図、図版11）

I区中央部東端に部分的に確認された遺構である。南側は調査区外に延びている。検出長が短いため断言はできないが、1・3号溝と並行して走っているように見える。埋土や、断面形状が浅い船底状であることなどが1・3号溝と類似しており、同時期の所産である可能性がある。出土土器はなく、時期は不明とせざるを得ない。

### 4号溝（第18図、図版12）

Ⅱ区中央部を南北に縦断する遺構である。南側は削平がひどく、遺構は極めて浅く部分的に途切れる箇所も見られるが、北側ではやや深さを増しており、Ⅱ区北端部付近では2条に分岐している。埋土や断面形状から、I区1号溝と連続する遺構である可能性があるが、やや距離が離れておりここでは別個の遺構として報告する。埋土は細かく分層すると5層に分けられるが、いずれも暗（茶）～灰褐色粘砂質土でよく類似しており、いずれもレンズ状堆積の様相を示す。出土土器としては弥生時代中期の土器が多いが、縄文土器・土師器なども出土している。量的に多いのは弥生時代中期須玖式土器であり、これが溝の時期を示すと思われるが断定はできない。

### 出土土器（第21図）

**縄文土器**（3） 3は縄文土器の甕の胴部片で、中位の「く」の字に屈曲する部分である。外面には巻貝の貝殻による調整痕（条痕）が全面に残り、内面も巻貝の条痕がうっすらと見られるがナデ調整により消される。鐘崎式の粗製甕であろう。

**弥生土器**（4～6） 4は弥生中期須玖Ⅱ式の甕の口縁部である。L字状に屈曲し、口縁端部上面を僅かに上につまみ上げる、いわゆる跳ね上げ状口縁の形状を呈する。5は弥生土器の甕の底部片である。小さな平底は僅かに上げ底気味であり、底部の厚さもある。中期初頭～前葉の須玖Ⅰ式に比定されよう。6は弥生土器の大型壺の底部であろう。外面にはハケ目が残し、内面にも底部付近に指オサエ痕が残るが、全体に丁寧な仕上げである。底部は小さなレンズ状底となるか。弥生後期西新町式の在り系甕か。

#### 5号溝（第18図、図版12）

Ⅱ区南部にあり、4号溝に並行して南北に延びる溝である。北側は攪乱により破壊されて途切れ、南側は調査区外に延びるが、その南に隣接するⅢ区からは延長が確認されていない。極めて浅い遺構であり、大半は削平により失われたものと見られる。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### 6号溝（第18図、図版12）

Ⅱ区南部、5号溝のさらに東側に位置する、延長が約4mと極めて短い溝状遺構である。やはり極めて浅い遺構で、本来はもう少し長かったものが削平によりその大半が失われたものであろう。埋土は一部に地山ブロックを含むがおおよそ黒～暗褐色粘砂質土で、おおよそレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

#### 7号溝（第18図、図版12）

Ⅲ区の中央やや南寄りにあり、調査区の中央より西側の調査区外に延びる溝状遺構である。13号土坑に切られ、これに先行する。深さは他の溝と比べてやや深く、調査区端部で約30cmをはかる。黒～暗褐色粘砂質土からなり、レンズ状堆積の様相を示す。弥生土器の小片が1片出土しており、この時期の遺構である可能性がある。

#### 8号溝（第18図、図版12）

Ⅲ区の南寄りにあり、7号溝と並行して西側調査区外に伸びる溝状遺構である。深さは西側に向かって深さを増し、調査区端部で15cmほどをはかる。埋土は黒～暗褐色粘砂質土を主体とし、黄褐色粘砂質土の地山ブロックを含む。弥生土器の小片が1片出土しており、この時期の遺構である可能性がある。

### （5）その他の遺構

#### 1号風倒木痕（第17図、図版11）

Ⅱ区北端部で確認された大型の風倒木痕である。半分ほどは調査区外の県道下に広がっており、安全上調査区の拡張は行っていない。人間の手によるものではないため、詳細な記録は取っていないが、内部から縄文土器が多く出土したため、土器の出土する範囲を掘り下げて取り上げたところ、中型のビニール袋一杯ほどの縄文土器が出土した。出土位置に何らかの傾向は見られず、埋土のうち黒褐色の部分から散発的に出土した状態であった。包含層や他の遺構などからも少量の縄文土器が出土しており、おそらく周囲に散在していた土器が風倒木痕や他の遺構などに入り込んだものであろう。以下、出土土器について記述しておく。

#### 出土土器（第21図、図版20）

**縄文土器（7～9）** 7は縄文土器の粗製甕の胴部片である。内・外面に棒状の工具による器壁調整痕がよく残る。8は縄文土器の甕の胴部片である。屈曲部に当たり、外面には渦巻き状文がヘラ状工具によって施される。内面はヘラ状工具による調整痕がよく残り、一部に丹を塗ったような赤変部分が見られる。9は縄文土器（鐘崎式）の甕の口縁部片である。ヘラ状工具で施された沈線により外面の全体が装飾され、口縁部は低い波状に湾曲し、ピーク部に把手状の突起がつけられる。いずれも縄文時代後期鐘崎式の所産である。

## (6) その他の出土遺物

### 包含層等出土土器 (第 21 図)

調査中、遺構を検出している最中に、あるいは攪乱等の掘り下げ中などに、少量ではあるが遺物が出土した。以下、遺物の時期ごとに見ていく。

**弥生土器 (10～17)** 10は弥生土器の壺の胴部上位片である。外面をハケ目、内面はヘラ状の工具を繰り返し同じ方向に動かしたナデにより調整しており、胴部中位には粘土帯の接合痕跡も観察される。後期前半か。Ⅱ区検出中の出土。11は弥生土器の底部片である。平底で、厚さはそれほどなく、胴部下半が僅かに内湾する形状から、須玖式の壺とみたい。Ⅱ区検出中の出土。12は弥生土器の壺の底部片である。平底であるが胴底部境から胴側に緩やかな内湾が認められず、中期末～後期前葉に位置づけておきたいが、小片であり詳細は不明である。Ⅱ区検出中の出土。13は弥生土器の大型壺の底部であろう。器壁が厚く、底部はわずかにレンズ状になるが底胴部境ははっきりとしない。外面にはハケ目、内面には指オサエ痕が残るが全体に丁寧な仕上げである。後期後葉～末の所産か。Ⅱ区検出中の出土。14は弥生土器の壺の胴部上位片であろう。浅い沈線により何らかの文様を刻むが、文様の全体像は不明である。色調、胎土の特徴、沈線の形状などから、板付Ⅱ式～城ノ越式期の所産とみたいが確証はない。Ⅱ区検出中の出土。15は須玖式の甕形土器の底部片である。平底で厚みを減じていて須玖Ⅱ式でもやや古い時期のものであろう。Ⅰ区包含層からの出土。16は須玖式の甕形土器の底部片である。平底で、底の厚みが中央と周辺ではほぼ変わらないことから、おそらく須玖Ⅱ式でも新しい段階のものであろう。Ⅰ区包含層からの出土。17は弥生土器の器台であろう。底部として図示したが口縁部の可能性もある。小片であり確定できない。外面調整は端部付近が横ナデで他は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目調整である。器壁が薄く中期須玖Ⅱ式のものとしたい。Ⅱ区検出中の出土。

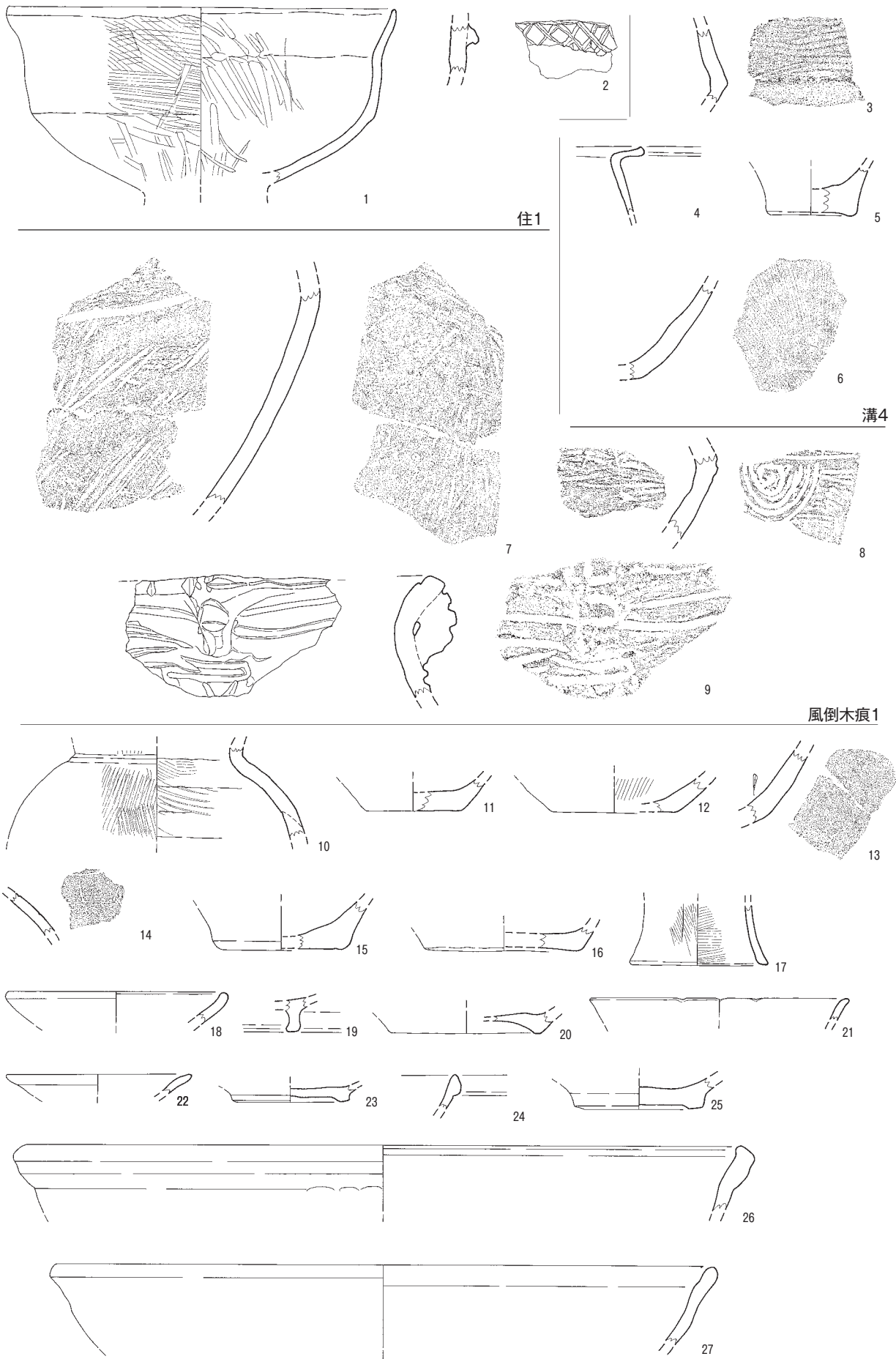
**土師器 (18・19)** 18は土師質の塊形土器として復元したが、他に例を見ない小型器種であり、破片が極めて小片であることから誤認の可能性もあろう。胎土は精良で焼成はやや甘い。Ⅰ区包含層からの出土。19は須恵器模倣土師器の皿の高台片か。小片で径が復元しにくいが強引に計測すれば約20cmほどになり、かなりの大型品である。Ⅰ区包含層からの出土。

**陶磁器 (20～25)** 20は施釉陶器のおそらく瓶形土器(徳利か)の底部であろう。全体を丁寧なナデ調整により仕上げしており、胴底部境のくぼんだ部分に緑茶褐色の釉が残る。Ⅱ区検出中の出土。21は青磁碗の口縁部片である。龍泉窯系か。口縁端部にごく浅く輪花文を刻む。釉には貫入が入る。Ⅰ区包含層からの出土。22は白磁皿の口縁部片である。小片であり口径の判断は難しいが図では約10cmに復元している。Ⅰ区包含層からの出土。23は白磁碗の底部片である。高台部が残る。高台の断面形状は逆台形で低い。Ⅰ区包含層からの出土。24は白磁碗の口縁部片である。極めて小片で口縁部径の復元が困難であるが玉縁の口縁部を持ち12C代のものか。Ⅰ区包含層からの出土。25は白磁碗の底部片である。胎土は精良だが釉に小泡が点在する。高台は低く断面形は逆台形を呈し、高台の内部には回転ケズリ痕が残る。Ⅰ区包含層からの出土。

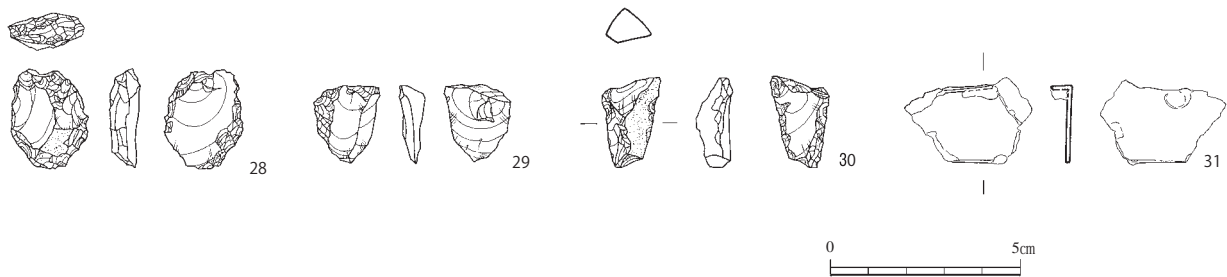
**瓦質土器 (26)** 26は大型の瓦質土器で、土鍋であろうか。破片が小さく、復元口径は確実ではない。口縁部は肥厚していきびれ部に爪痕が残る。Ⅰ区包含層からの出土。27は瓦質の鉢の口縁部片である。直径約18cmほどで図示したが小片で径は不安がある。胎土は比較的精製で焼成は硬質である。Ⅱ区検出中の出土。

### その他の出土遺物 (第 22 図、図版 20)

**石器 (28～30)** 28は黒曜石製のスクレイパーか。湾曲する辺に細かい剥離を施して刃部を作出



第 21 図 各遺構・その他出土土器 (2・4～6・10～17 は 1/4、ほかは 1/3)



第 22 図 遺跡出土鉄器・石器実測図 (1 / 2)

する。最大長 2.6cm、最大幅 2.1cm、最大厚さ 0.8cm、重さ 4.3 g をはかる。29 は同じく黒曜石製の縦長薄片か。表面の片側に細かい剥離を施して刃部を作出し、背面は 1 回の打撃により母岩から剥離させている。最大長 2.0cm、最大幅 1.6cm、最大厚さ 0.7cm、重さ 1.7 g をはかる。3 は姫島産の白濁色を呈する黒曜石片で、不定形の二次加工薄片である。横断面が三角形状を呈し、刃部の作出は見られない。最大長 2.4cm、最大幅 1.6cm、最大厚さ 1.0cm、重さ 2.5 g をはかる。

鉄器 (31) 31 は鉄器片である。横長で一片を短く直角に折り曲げており、刃部が見られないことから、鉄鎌の柄部付近か。極めて薄く、剥落している可能性もある。最大長さ 3.2cm、幅 2.1cm をはかる。

#### (7) 小結

今回の調査により確認されたことについて簡単なまとめを行っておきたい。まず、1 号竪穴住居跡であるが、確かに住居に伴う可能性が高い鉢形土器がピットから出土している一方で、おそらく弥生土器と見られる土器の細片が複数点出土していることから考えれば、やはり本住居跡は弥生時代に比定すべきであろうか。西側に近接する塔田琵琶田遺跡や、さらに西の西ノ原・大西遺跡群などでも弥生時代末～古墳時代前期の遺構群が出土しており、浅い谷を挟んで近接する本遺跡でもこの時期の遺構が出土することに大きな違和感はない。1 号住居跡は、小規模で支柱穴を伴わないという特徴があり、比較的大きな集落である塔田琵琶田遺跡、西ノ原・大西遺跡群の周辺に位置する小規模集落の一端を構成していた可能性は高い。住居跡が出土したⅢ区の西側隣接地は、周囲よりやや高く圃場整備による改変を受けていない畑地として現在も耕作が行われており、この土地に集落の続きが眠っている可能性を考えたい。

15 基検出された土坑であるが、いずれの土坑からも時期を特定できる遺物の出土がなかったことは残念な結果であった。どの土坑も極めて浅く、相当に削平を受けているであろうことは容易に推測できる。土坑以外にもいくつか遺構があったのであろうが、今となっては知るすべはない。

溝状遺構としては、調査区を南北に縦断する並行する 2 本の溝の一部を構成していた可能性がある溝群が見つかり、その一部である 4 号溝からは弥生時代の土器片が多く見つかったことは、この時期における本遺跡の性格の一端を示すようで興味深い。周辺には弥生時代中期の遺跡は多くなく、今後の調査成果の積み重ねが期待される。

風倒木痕から縄文時代後期鐘崎式土器の一群が見つかったのも一つの成果である。近年、本遺跡の周囲でもこの時期の資料が増加の傾向にあり、その一部として活用が計られることを願いたい。

## IV おわりに

本報では、豊前市久路土にある二つの遺跡の調査成果を報告した。これらの調査成果についてまとめを行いたい。

検出した遺構・遺物の時期と性格であるが、久路土芝掛遺跡第2次調査では弥生時代の貯蔵穴、古墳時代前～中期の竪穴住居跡と溝、それに古墳時代後期の溝を調査することができた。もっとも主要な遺構は古墳時代前～中期のもので、おそらく集落遺跡の南端を発見したものと考えられる。東西に走る大溝が集落の南端部を区画する役割を持つ溝で、その北側に当時の集落が広がっていたものと見られる。ただし、周辺地形を見ると、北西側は市道を挟んで1m以上現地表面が下がっていて、集落が広がるような地形には見えない。この東西を横切る市道より北側は、もはや豊前市域では数が少なくなった、大規模な圃場整備が行われていない水田・畑地が広がっていて、大規模な地形の改変を被っていない可能性が高いと考えられ、この地形の落ちは旧来のものである可能性が高い。したがって、古墳時代の集落は北東側の高まりの方に細長く広がっていた可能性があると考えられる。おそらく、調査地点から北東側に、細長く台地上の微高地が伸びており、その上に集落が広がっているのであろう。

弥生時代の遺構についても同様のことがいえよう。今次調査では貯蔵穴1基のみが発見されたが、貯蔵穴は数十基が群集するのが通例であり、またしばしば集落内において他の遺構とともに見つかる。したがって今回発見した貯蔵穴も、もともとたくさん存在したうちの1基に過ぎず、調査地外に広く弥生時代前～中期の集落が広がっていたと考えるべきであろう。このことは、平成23年度に豊前市教育委員会が行った隣接地の調査（第3次調査）で弥生時代前期の竪穴住居跡が見つかったことから裏付けられる。やはり、北東側にわずかに残る高台に集落の本体が広がっていたものと見られる。今後の調査の進展により多くの成果が期待される場所である。

奈良時代の溝状遺構については、これに伴う遺構がはっきりとせずその性格は不明である。今後の検討課題としておきたい。

これに対し、久路土高松遺跡については、報告でも述べたように、今回の調査で遺構が広がっていると見られる範囲の大部分を掘りつくした可能性が高く、唯一南西側に僅かに続く遺構が広がる可能性が残されている程度であろう。ただし、これに隣接するⅢ区では今次調査で唯一竪穴住居跡を発見しており、集落遺構が広がっている可能性がある。今後の開発には注意を払う必要がある。

なお、この竪穴住居跡であるが、遺構の埋土からはほとんど遺物が出土しておらず、図示した弥生時代後期と考えられる壺の胴部片の他に数点の弥生土器または土師器と考えられる土器が出土したのみであった。一方、住居跡の床面から検出された小ピットからは、縄文時代後期の可能性が高い浅鉢形土器が出土していて、遺構の時期をいずれに属するものとするべきか結論が出せなかった。しかし、隅丸ではない方形を呈する竪穴部、壁溝の存在などといった竪穴住居の形態上の特徴からは、やはり弥生時代以降の遺構の可能性を考えたいと思う。床面から支柱穴を検出し得なかった点についてはなお疑問が残るが、一応ここでは弥生時代後期の遺構としておくこととし、今後の隣接地の調査成果を待って再度判断することとしたい。

県道バイパスの工事は今も続いており、平成24年度は東九州自動車道豊前インターチェンジ（仮称）のアクセス部分の調査を行った。その後、久路土芝掛遺跡の北側へと工事が進むにつれ、新たな発見も多くなされるであろう。今後の調査の進展に期待しつつ本稿を閉じることとしたい。



# 圖 版

1 I区 (右が北)



2 II・III区 (右が北)





1 II区 (右が北)



2 III区 (右が北)



3 IV区 (右が北)



1 調査地（北から）



2 調査地（西から）



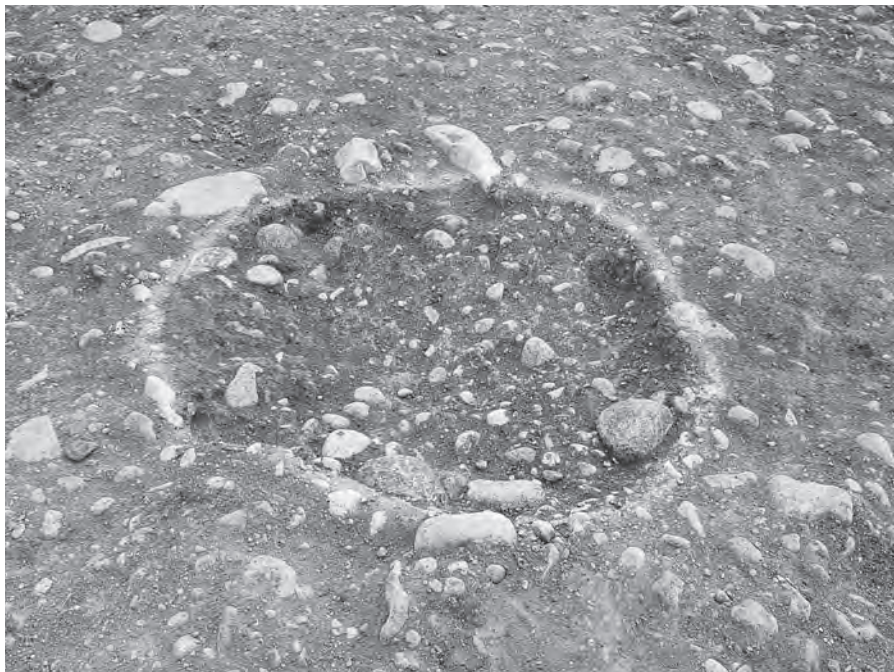
1 基本土層（I区中央部西壁）



2 1号住居跡完掘状況（東から）



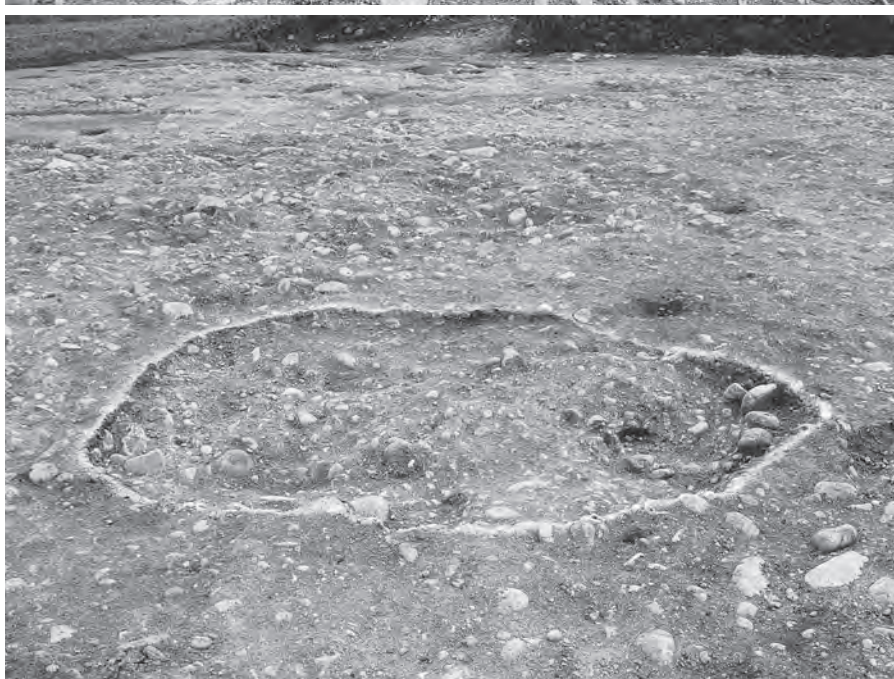
3 1号住居跡ピット内縄文土器  
出土状況（北から）



1 1号土坑完掘状況（北から）



2 2号土坑完掘状況（北から）



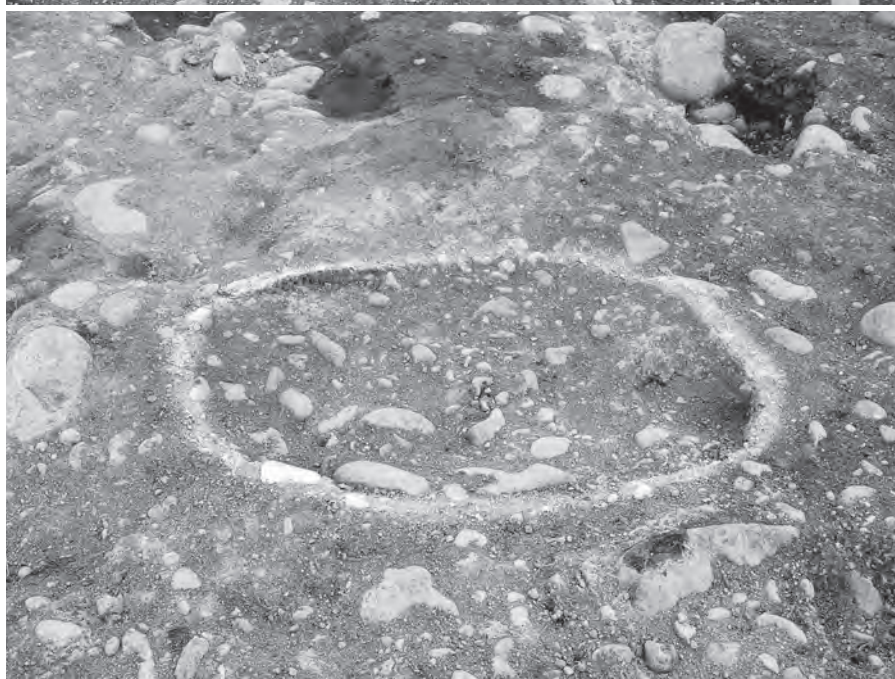
3 3号土坑完掘状況（北から）



1 4号土坑完掘状況（北西から）



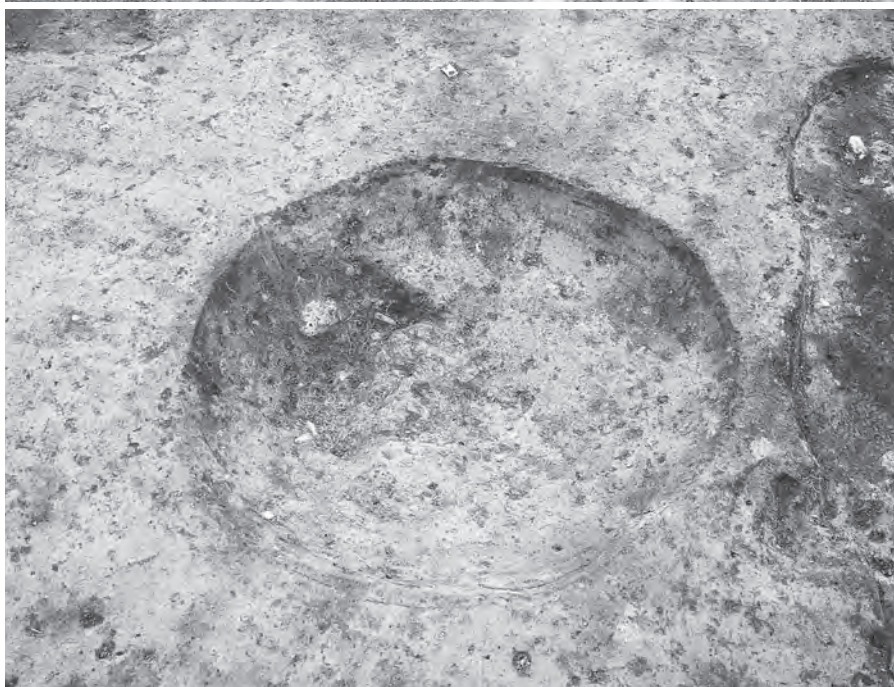
2 5号土坑完掘状況（北から）



3 6号土坑完掘状況（北東から）



1 8号土坑完掘状況（南から）



2 9号土坑完掘状況（東から）



3 10号土坑完掘状況（西から）





1 11号土坑完掘状況(北東から)



2 12号土坑完掘状況(東から)



3 13号土坑完掘状況(東から)

1 14号土坑完掘状況  
(南から)



2 15号土坑完掘状況  
(西から)





22-1

22-2



21-1



22-3



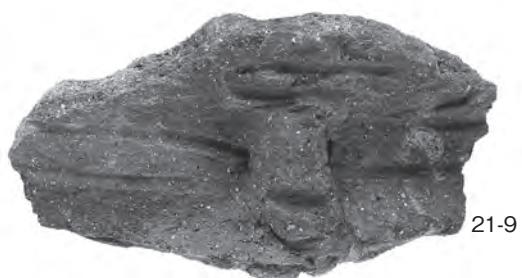
21-2



21-8



22-4



21-9

ふりがな	くろつちしばかけいせき・くろつちたかまついせき							
書名	久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡							
副書名	県道犀川豊前線バイパス建設に伴う調査報告 第1集							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第242集							
編著者名	小澤佳憲							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒818-0118 福岡県小郡市三沢5208-3 (Tel: 0942-75-9575, Fax: 0942-75-7834) HP: <a href="http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/">http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/</a>							
発刊年月日	2013年(平成25年)3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろつちしばかけいせき 久路土芝掛遺跡	ふくおかけんぶぜんしくろつち 福岡県豊前市久路土	40214	-	33° 35' 27"	131° 07' 47"	20091221 ) 20100330	1250㎡	県道バイパス建設
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
久路土芝掛遺跡	集落	弥生時代	土坑(貯蔵穴)					
		古墳時代	竪穴住居跡 溝	土師器				
くろつちたかまついせき 久路土高松遺跡	ふくおかけんぶぜんしくろつち 福岡県豊前市久路土	40214	-	33° 35' 35"	131° 07' 50"	20100824 ) 2010120*9	3450㎡	県道バイパス建設
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
久路土高松遺跡	散布地	縄文時代 (後期)	(風倒木痕)	縄文土器				
	集落	古墳時代 (前期後半~中期前半)	竪穴住居跡 溝(・土堀)	土師器				
要約	<p>久路土芝掛遺跡からは、弥生時代の袋状貯蔵穴1基、古墳時代中期前半頃の竪穴住居2棟、古墳時代前期末~中期前半頃の環濠の可能性のある溝1条を確認し、溝と竪穴住居から多くの土師器が出土した。</p> <p>久路土高松遺跡からは、弥生時代の溝や時期不明の土坑群のほかに竪穴住居1棟を調査した。竪穴住居からは縄文時代後期の浅鉢と弥生時代後期の土器片が出土しており、遺構の形態からは弥生時代後期の可能性が高い。このほか、風倒木痕から縄文時代後期の土器が多く出土した。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
J H	2117104
登録年度	登録番号
24	0013

久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡	
福岡県豊前市久路土所在	
久路土芝掛遺跡 2 次・久路土高松遺跡 2 次調査の報告	
福岡県文化財調査報告書 第 242 集	
平成 25 年 3 月 29 日	
発行	九州歴史資料館
	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
印刷	大同印刷株式会社
	〒 849-0902 佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20